

「巻き込まれ親父の慰安」

作 藤次郎政秀

●プロローグ 祝！借金返済

息子娘共のエージェント派遣の稼ぎのお陰で、当初H Gが生きている間に白山亭とその他建屋の改装費の返済が無理と考えていた借金が完済する事が出来た。

碓屋のガンスミス部門営業利益は、息子娘達が今では全員 “特別銃器携帯・使用許可証” の “限定解除” を取得し、H GやI Iに代わって、 “特別銃器携帯・使用許可証” の試験官とか、銃器インストラクター派遣も請け負えるようになり、今まで営業利益が少し赤字続きであったのが、黒字…と言ってもほんの少しだけだが、経営に損失を出さなくなった。

白山亭の営業も好調で、日々の売り上げが赤字になったことがなかった。

碓屋のエージェントも、次のエージェント候補者達が育っていた。

E YとN AとK Tは、各自の休暇を利用して、白山亭の女給のアルバイトと碓屋のガンスミスの工場を訪れ、H GとS Kの指導の元、銃器整備や教育を行った結果、 “特別銃器携帯・使用許可証” を受験して、それぞれ、

E Y（海兵隊員）は、拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機銃・重機関銃（口径二十ミリ未満）・擲弾筒（ランチャー）の試験に合格し、 “限定解除” を取得した。

N A（B S A T隊員）は、拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機銃・擲弾筒（ランチャー）の試験に合格した。

K T（港町警察署署員）は、拳銃・小銃・散弾銃・擲弾筒（ランチャー）の試験に合格した。

…なので、この三人はH GとS Kの事を “師匠” と呼んでいる。

ただ取得動機が各自違った。

E Y、任務上必要と言うより、最初から碇屋に弟子入りする気満々。

N A、H Y達に触発されて：但し、職務上必要を感じたため。別に碇屋に弟子入りする気はない。

K T、いつも受付で施設借用の届出書を書いているH Y達の“特別銃器携帯・使用許可証”に興味を持ち、自分も取得できると思ったため。

他にも、港町水上警察署のM SとA KもK Tに触発されて、“特別銃器携帯・使用許可証”を取得するために、白山亭の女給のアルバイトと碇屋のガンスミスの工場を訪れ、H GとS Kの指導の元、銃器整備や教育を受けている最中である。

H Gは息子娘達と白山亭ならびに碇屋の従業員達、皆の苦労を労おうと、慰安旅行を考えた。

●温泉行くぞー

夕食時の母屋の食堂：H Gは食卓に居るH Y、I Y、T Y、H M、S K、A Mに慰安旅行の話の切り出した。

：M PとI Aは夜のP u b営業で白山亭店内に居ます。作者

H G「皆、白山亭と他の建屋の改修工事の借金が完全に返済できた。なので、皆に苦労して貰ったので、慰安旅行をしようと思う」

「[[わ〜こ]]」

H Y「慰安旅行ですか：いいですね」

T Y「どこに行きますか？」

H G「まだ、決めていない。来月の定休日に一日足して二泊三日で予定していると言う事だ

け」

A M 「准尉、慰安旅行なら、温泉旅行ではどうですか？」

H G 「温泉か…いいね！」

H Y 「あなた、どここの温泉に行きましょう？」

H Y の言葉を聞いて、I Y は（姉さん、どさくさに紛れて…）と苦笑した。

T Y 「G 県領地の温泉なんてどうでしょう？ここから近いし、有名な温泉地もいくつもあるし」

I Y 「私は、F 県領地の事件の時に准尉とT T さんとH Y 姉さんが宿泊したF 県領地の山中の温泉宿に行ってみたくて…」

H G 「えっ？あの温泉宿？」

I Y 「はい、以前T T さんとH Y 姉さんが嬉しそうに自慢していたので…それに、Y M 支部長と思ひ出の地と聞いていますが…」

S K 「あー、そんなロマンスがあったんだ。H G さんよ」

と、S K がH G をひやかす。

H G 「あのな、Y M は大学の後輩！彼女とは大学のサークルの合宿で泊ったの！知ってんだろ、俺がF 県領地の大学に行ったのを」

S K 「へえー、怪しいな」

と、訝しがるS K と、H Y とI Y のジト目…

A M 「いいですね、そこにしましょう！准尉」

H G 「あそこか…俺はいいけど、他の奴らがなあ…お前さん、どう思う？」
と、H G は隣に居るH Y に聞いた。

H Y 「あら、わたしはいいと思うなあ」

H G 「遠すぎないか？俺は、T Y の言うG 県領地の温泉でもいいと思うが」

HY「いえ、わたしはあのしなびた雰囲気は好きですよ…でも、若い人達は…どうでしょ？」

AM「自分は、そう言うワビサビの世界…と言うのが好きですが…」

TY「だったら、“F県領地の事件を振り返るツアー” って言うのはどうですか？」

…以後、“F県領地の事件”については、「巻き込まれ親父の撤退」「巻き込まれ親父の反撃」を参照。作者

HG『F県領地の事件を振り返るツアー』ね…どうして？」

TY「わたしと、HY先輩、TTさん、IYを除くと、他の人達はF県領地の事件の当事者ではありません。でも、あの事件があつて、わたし達は、准尉の元に引き寄せられるように集まってきました…だから、聖地巡礼みたいな？」

HY「TY、いいわね…F県領地の事件だったら、F県領地の市街地から始まって、あの温泉宿とO県領地に渡った漁港とIY独り舞台の“赤ずきんちゃん作戦”の林、それから、あの“狸と貉（前外務大臣とC国反政府組織の一員だった元C国大使）”を捕まえた海岸の温泉地…最後はわたしとIYが准尉に弟子入りを宣言した市街地に戻ると言うのは？」

AM「あつ、それ自分も賛成します」

IYは、HYの『“赤ずきんちゃん作戦”の林』と言ったのを聞いて、複雑な表情をした。それでも、HG初期の弟子達（IY、HY、TY）の思い出を振り返ると、その後の弟子達に新生碓屋創業のきっかけになった場所を案内する事に意義があると思い、

IY「私も、それがいいと思います」

と、賛成した。それを聞いてHGは

「そうするか」

と言ったので、そこに居た皆

「[[はーい]]」

と返事をした。

その後、H GはP u b営業中の白山亭店内を訪れて、そこに居るマスターのI Iと女給のI AとM Pに話をした。また厨房に居るシェフのS Mに話をすると

「いいですね。F 県領地の食材とか料理とか興味ありますね」

と言って参加を表明した。

翌日、出勤したT TとK M、厨房のシェフのS YとS Hにも話をする、T Tは喜んで、

「あら、F 県領地の事件の振り返りですか、いいですね。私絶対行きます！」

と言った。K Mも参加を表明したが、S YとS Hはやはり、子供の事があるとの事で参加を辞退した。

H Gは早速、白山亭の定休日に一日追加した二泊三日のスケジュールをH Y達と共に決めて、鉄道とレンタカーと宿の予約をした。

●バナナは、おやつに…じゃなくて！

H Gは、予約が取れたので、旅行の計画を発表した。

「おじさん、その日は勤務日なの…残念！留守番してるわ」

と言って、姪のH Mは早々にリタイヤ宣言をした。

「准尉、質問です」

と、A Mが手を挙げた。

「なんだ？」

「拳銃を携行する必要がありますか？」

「…うーん、そうだな…慰安旅行だから要らないって言えば、そうなるが…あのF 県領地だからなあ…O J少尉（O 県領地海軍基地の司令部情報部情報課少尉）の話では、未だにC 国

反政府組織の工作員の残党が跋扈していて、掃討にそうとう苦勞しているらしい……」

H Gの『掃討にそうとう苦勞している』の言葉に、（ダジャレ？笑っていいのかなあ……）と、複雑な表情をしたのが数人いた。

「なら、持つてくとイイネ」

とM Pが言うと、他の人も頷いた。

「あと、防弾インナーを忘れずにな」

「「はい」」

●なんで計画がバレル

R 交易商公社事務所：

「こんにちはー」

「おう、H Gいらっしやい」

「来月のコーヒー豆等の仕入れを頼みに来た」

「はい、毎度あり」

H GはR Rと白山亭に卸して貰う、コーヒー豆等の品物の量について話をした。白山亭オリジナルコーヒーのブレンドは、H Gの曾祖母のレシピに基づいて世界各地のコーヒー豆の配合が決まっていて、それをR Rが社内でブレンドしている。

一通り、話が済んだところで、R Rが

「おう、ところでH G、白山亭と碓屋のメンツと温泉行くんだってな！」

と言ったので、H Gは驚いて、

「なんで……お前が知ってる！」

と訊ねると、

「お前のとこのI AがSに言ってた」

「あつ、そう（I Aは、相変わらずだなあ…ま、旅行は別に秘密な事じゃないしな）」

とH Gが納得して返事すると、R Rが

「いいねー」

と言って、羨ましそうにH Gを見る。それに対して、H Gが（R R達も誘うか）と考え、

「お前さんも行くかね？ F県領地の温泉に二泊三日…日にちは、来月のウチの定休日」

「そーだな、L連れて行こうかな？」

「奥さん孝行したら？」

とH Gがけしかけて言うのと、R Rの背後から

「あら、嬉しい！」

と言って、R Rの妻のR Lがお茶を乗せたお盆を持って立っていた。

「いつの間に！」

と、驚くR Rをよそに、H GとR Rにお茶を出しながら、

「H Gさん、F県領地の温泉って？」

「以前、F県領地に旅行に行った折、事件に巻き込まれた時に泊まった山中の温泉宿と、例の『狸と貉』を捕獲した海岸にある温泉地…山中の温泉宿はしなびた風情のある温泉宿で、海岸にある温泉地は、本当に温泉地と言う所だよ」

「そうね…わたし達だと、しなびた温泉宿がいいけど、若い子達には、どうでしょう？」

「俺は、温泉旅館内ですべて完結するのも…面白くないな。俺だったら、地元を見て回りたい」

「職業柄、色々見て回って、なにが流行っていると知りたいのか」

「そうだね」

「山中の温泉宿は、あの周りに何もない所だよ。だから、Lさんの好みかな…逆に海岸の温泉地は街自体が賑やかだから、R Rの言う地元を見て回るにはいいと思う」

「なら、参加したい…できればSも入れて三人で」

「いいぜ」

「あんた、嬉しい！」

白山亭店内…

H GがR交易商公社から戻ると、M ZとT Kが二人そろって来店していて、バーカウンタ―に居るT Tと剣呑な雰囲気醸し出していた。

H Gが三人に割って入る様にバーカウンターに入ると、T Kが

「あのう…H G社長」

珍しく、T KがモジモジしながらH Gに問いかける。

「はい？」

「なんでもF県領地の温泉に行かれるそうで…」

H Gは（今度は、どこから…まさかI Yじゃないやなく、ましてやT Tでもないし…）と
思っ

「ほう…どなたから聞きましたか？」

と訊ねると、T Kは

「Kお嬢様からです」

と答えた。（Kお嬢様か…じゃ情報源はI Yだな）とH Gは考え、

「Kお嬢様ですか…I Yが楽しみにしていますから…そもそもF県領地の温泉に行きたいと
いい出したのは彼女ですし…彼女がKお嬢様にお土産を買う話をしていましたので、それ
でお知りになりましたか？」

「はい、Kお嬢様はYお嬢様の御土産を楽しみにしているそうです」

「そうでしたか…確かに、来月の定休日を使ってF県領地の温泉に慰安旅行に行く事にな

りまして」

「それで、ご相談が…」

「はい？ Kお嬢様のお土産についてですか？何かアレルギー反応する食べ物とかあるので
しょうか？」

「いえ！そうではなくて…」

「？」

「私も、その温泉旅行に連れて行つて貰えませんか？（キヤー言っちゃった）」

「ハイ？」

H Gの目が点になった。

「准尉、部外者は遠慮して頂いた方がよろしいと思います」

とT Tがキツメに言うと、T KはT Tを睨み返す。

「あら、T K様が行きたいとおっしゃるのですから、認めてはいいかがですか？H G社長」

とM ZがT Kに加勢する。H Gは（そんなこと言つて、お前さんも、A M目当てについて行きたくないじゃないの？）と勘ぐっていると、T Tが

「…M Zさん、そう言うあなたも、ついて行きたいのではないですか？」

と言うと、

「わっ…私は別に…、でもどうしても言うのでしたら、ついて行ってもいいですわよ」

とM Zが赤面して言った。それを見てH Gは（このツンデレ！）と思った。

「そうですか。だったら、『どうしても』とは言いませんので、この話に割り込まないでくださいいますか？」

とT Tが高飛車に言うと、M Zは途端に

「いっ、いえ…前言を撤回いたします…私も温泉旅行に連れて行ってください」と慌てて言った。

「あのー、お二人とも…温泉と言いましても、豪華な温泉宿ではありませんよ…そのしなびた雰囲気売りの宿ですので…それに遠いF県領地まで行くので…」

とH Gが言うと、

「あらー、しなびた雰囲気…いいですわー、そんな温泉でゆっくり浸かりたいです（できれば、H G社長と混浴で…キャー）」

とT Kが嬉しそうに答え、M Zは恥じらいながら

「私だって、セレブではございませんのよ。皇国の山中の温泉で地元の料理と温泉を味わいたいですわ（…できれば、A M様と二人っきりで…さしつ、さされつ…）」

…よく、そんな言葉知ってるな？D国大使館員が…作者

と、余計行く気を煽ってしまった。それを見てT Tがため息をつく、

「そうですか…私は准尉が許可すれば、もう反対は致しません」

と諦めて言った。それを聞いて、T KとM Zは手を取り合って喜んだ。

「では、H G社長。私達も温泉旅行に連れて行ってください！」

と言ったので、H Gは（あつさり、T Tが引くなんて…）と驚きつつも、

「はい、わかりました。予約を追加します。

と言ったので、T KとM Zは喜んだ。

●誰が呼んだか？

慰安旅行出発当日…

白山亭母屋に集合した面々…。H Gが一言

「じゃ、行こうか！」

「「はーい」」

駅前のロータリーを回って、Y国際港駅に着くと、何故か旅行支度をして駅前に居るE Y

とN AとK T…

「『師匠！私達も連れて行つて下さい！』」

「なんで、こうなる」

と、H Gが驚いたが（こいつらには、アルバイトのシフトの都合から、慰安旅行について話をしたっけ）とハタと思い出し、

「君達、休暇は？」

とH Gが訊ねるとK Tは、

「署長（港町警察署署長、H Gの親戚）に話をして、休暇を頂きました」

E Yは、

「大隊長（Y海軍基地所属の海兵隊大隊長E M大尉）に話をしたら、『是非行つてきなさい！』ついでにS R（O県領地海軍基地所属海兵隊大尉。E M大尉の元旦那）に会ったらヨロシク』

と言われ、休暇をいただきました」

N Aは、

「大将（B S A T隊長I T、民兵会社時代のH Gの元部下）に話をしたら、『いいぞ、行つてきな！』と言われ、休暇を頂きました」

と、各自答えた。H Gはこの三人は白山亭でのアルバイトで売り上げに貢献してくれているので、T KやM Zの様に最初から反対する事もできずに困っていると、H Yが

「准尉、いいじゃないですか…彼女達は、わたし達同様に准尉や軍曹の手ほどきを受けて、『特別銃器携帯・使用許可証』を取得した仲間ですし、白山亭の女給として一緒になって働いている仲間ですから…他のアルバイト達とは違いますよ。M SとA Kは都合がつかなくて参加できませんでしたが」

と言うと、「『H Y姐さん、ありがとうございます！』」と言って、三人は頭を下げた。

「K M…こいつらの追加予約は出来る？（これは…T TとH Yが、T KさんとM Zを連れて

行く事に対する俺への当てつけだな…」

「大丈夫だと思うよ…予約状況聞いたら、今は繁忙期を外れて、空きがあると言ってたから…」

「だったら…追加予約お願いします」

「OK」

「二師匠！ありがとうございます。一生付いてきます」

「はいはい（師匠…か、I Yみたいな事を…）」

これで、KMとSMを除いて全員「特別銃器携帯・使用許可証」持ち。なお、RR一家はC国の「特別銃器携帯・使用許可証」の国際許可証を持っている。ましてや、TKとMZはそれぞれの国発行の殺人許可証を持っているので、凶悪…

●更に増員

帝都駅発の夜行列車に乗り込む。

翌日早朝…F県領地の駅に降り立つ。

駅改札口を出ると。

「先輩…！」

と呼ぶ声がしたので、HGが声の主に驚いて見ると、そこにHGの大学の後輩で民兵会社時代の元F県領地支部長YMが手を振って居た。

「なんで、ここにYMが？」

とHGが驚くと、

「私呼びました」

と言って、TTが舌を出した。

…Y Mの家は、F 県領地の隣のS 県領地です。作者

「と、言う事は？」

「はい、彼女も今回の温泉旅行に付いてきます。あつ、部屋の追加予約は済ませてあります」
「策士だな！（本当に女子のコミュニティー…半端ねえ！あつ、だからM ZとT Kさんの同行を許したのか）」と思った。

「はい」

と言つて、T Tが笑つた。そこにY Mが近寄つてきて、

「H G先輩、ご無沙汰してます」

と笑顔で挨拶してきた。H Gは「いや、久しぶりだね。元気か？」「はい」と言う挨拶をし、T Tに笑顔で

「あら、T T久しぶりー、招待ありがとー」

とY Mが言うと、T Tも

「Y M、久しぶりー」

とお互い少しかがんで体を互いに反対に傾け、小さく手を振りあうと言う。恒例の“オバハンの挨拶”をする。その後、H YとT YとI Y達に挨拶する。I A以下の新しく弟子になった者達、K T達弟子予備軍達、R R達ゲストにも挨拶した。

Y Mの様子を見て、T Kは（Y Mさんと言ったわね…この方は、確かH G社長の大学の後輩の方…T Tさんと仲が良いのですね…味方に付けないと）と考えた。

「…さて、レンタカー借りていくか」

と、H Gが言った所で、Y Mが心配そうに、

「あの一、先輩」

「なんだ？」

「こんな大人数（現時点で、二十一名）で、それぞれ車に分乗して向かうのですか？」と訊ねた。

「それは大丈夫、I A！」

と言って、H GはI Aを呼ぶと、

「はい、准尉」

「この娘は大型二種（旅客用バス）の免許を持ってる」

「そうなんですね。凄いわね」

とY Mが驚いてI Aを見ると、I Aは

「ハイ」

と微笑んで返事をした。

●サスペンス劇場：みたいな

レンタルのマイクロバスに乗り込んだH G一行。まだ山中の温泉宿に向かうのは早すぎるし、さりとて、市街地の観光は最終日に計画しているので、かつてO県領地に渡った時にお世話になった漁港に向かった。その道中でF県領地の事件に巻き込まれた時点での話をH GとY M、それとT T、H Y、T Y、I Yがしていた。

途中、海岸の温泉地の前を通り、車窓から見える温泉地を「明日、ここの温泉宿に泊まる」とH Gが説明した。

かつてO県領地に渡った時に使わせて貰った漁港に立ち寄ったH G一行。バスを降りて、漁港を歩きながら、O県領地に渡った時の話をしながら、Y M達が先に渡った後に、一時期立てこもった港口の小屋での話とか、T YがI YとI Fの命令でここから一度O県領地を往復した事とか、その時のI Yの根暗の話とかして、I Yが「やめてください！」と怒ったり、その後、I Fが二人に対して命令違反に問われた話をした。

漁港の事務所で漁労長と再開して、あの時のお礼とかした。

S Mは漁労長にここで捕れる魚介類の事や地元の料理について熱心に訪ねているのを見て、H Gは（研究熱心だなあ…）と感心していた。

漁労長が小魚の干物を焼いて出してくれたので、H Yは喜んで干物を両手に持って食べているのを（前の時もそうだったが、本当に小魚の干物が好きだよな…）と見ていた。

次に、マイクロバスでF県領地から撤退時に通った道を逆に辿る。

林に着いて、バスを降り、H Gは皆を連れて林の中に入った。一人I Yだけ暗い表情をしていた…

H Gは皆を林の入り口（撤退時には、林の出口、H G達が日没まで身を潜めていた場所）にとどめ、一人I Yが倒れていた林の中の木漏れ日が差す場所を探す。その間、T Tがその時の話をする。相変わらず暗い表情で俯いているI Y…H Yはそれを見て、

「I Y…これは、あなたにとって大切な事なのよ…あなたの『死にたがり願望』を払拭した親父の荒療治の場所だから…この場所をよく目に焼き付けて…今のあなたが居るのはあの時の『赤ずきんちゃん作戦』で、あなたの『死にたがり願望』をこの林に捨てることできて、また暗い性格も明るくなったからよ！だから、この話は恥ずかしいじゃなくて、笑い話にしないと、後々まで引きずっていく事になるわよ」

とI Yの肩に手を置いて言うと、I Yはハッとして俯いた顔を上げH Yを見つめ

「…そうでした。私が親父の役に立とうと、生きる決心をしたきっかけがこの場所でした。いま考えたら笑い話ですね。H Y姉さん」

「そうね…フフフ」

やがて、H Gが『赤ずきんちゃん作戦』でI Yがシェリー酒を一気飲みして倒れていた

場所を特定すると、手を上げて皆を呼んだ。

「准尉…よく判りましたね？」

と聞いたのは、倒れていたIY本人。

「これ…」

と言って、HGが指差した先には、シェリー酒の瓶が転がっていた。それを見てIYは顔を赤らめた。

「えっ、見つかったの？」

とHYが言うと、TTが

「…確かに、この瓶ね…よく、ここに残ってたわね」と言う。

「…この瓶の中身がシェリー酒と気づかず、ただの水だと思って、斥候任務の緊張のあまり一気飲みして酔って倒れました…そして、准尉から貸していただいた拳銃を使えなくして、また買っていたいただいた衣装も汚してしまいました」

とIY自ら告白した。それを聞いてHYは（さっき、わたしが言った事、実践してるわね…克服出来たわね）と思った。また、HGはIYが自ら告白したのに少し驚いて（…これを自ら言うとは…成長したなIY）と思った。

しかし…

「…衣装ってなんですか？」

とMZが質問すると、IYは一瞬暗くなったが、

「HY姉さん…あの写真まだありますか？」

と自らHYに訊ねると、HYはニッコリして頷き、自分のスマートフォンを操作して、

「こういう格好してたの」

と、IYの『赤ずきんちゃん作戦』時の、林の中に倒れているIY、HGに抱き起されたI

Y、HGに背負われたIY等の写真を見せた。

「…やっぱり、消さずにまだ持っていたんですね」

と、IYが嫌味ったらしく言うのと、

「当ったり前じゃん！」

とHYは笑って言った。

「私も見せて…」「わたしも」…

と入れ替わり、立ち替わり、HYのスマートフォンのIYの写真を「IY可愛い！」と言って見る人達…その中で、TKが、

「あら…Yお嬢様。血が…」

と言うと、一度見た人も慌てて、「どこ？」とIYの写真を見直す。それが一番良く分かるのは、HGがIYを抱き起したときの写真…IYの口からこぼれる赤い液体…腹部から膝にかけて同じく赤い液体…腹部を撃たれたか刺されるかして口から血を吐いているように見えた。

「ああ…これはですね、この（落ちている瓶を指して）中のシェリー酒を水と勘違いして一気飲みした時に、口からこぼれたシェリー酒で出来た染みです」

と笑いながら説明した。それを聞いてHG、HY、TTは（IYは、あの時の事を克服して生まれ変わった）と思ったが、当のIY本人は未だ苦手意識のあるTKに対しての精いっぱい虚勢だった。

「この時は、本当にIYが林中に潜んでいると思われる敵に襲われて、刺されるか撃たれたかと思って驚いたけど、結果IYがシェリー酒を一気飲みして口からこぼしたことが分かっただけで安心したわ」

とTTが言うと、HYも

「そうだったわね…TTが『サスペンスドラマの一シーンとかね…テーマ曲流したりして

…(ジャンジャンジャー！作者(笑))』とか言って、笑ってたっけ」

「…そう言えば、この時准尉は、I Yを抱き起した時に手に付いたシェリー酒を見て、『なんじゃあ！コリャゝア』と言って、『あんたのセリフじゃない！』と周りから突っ込まれたし…」

と言って、皆笑っていた。

「…そう言えば、あの衣装どうした？確か母屋まで持ってきたよな？」

とH GがI Yに訊ねると、I Yはバツが悪そうに

「はい、あの後染み抜きをしてまだ持っています…流石にブラウスは染み抜きが完全にはできなくて捨てましたが、フード付きケープとスカートは赤い生地でしたので、染み抜きして目立たなくしました…」

と、I Yが言っている最中に母屋でI Yと同室のH Yが

「たまに引つ張り出して、部屋で着ていますよ。またある時は、大切そうに撫でまわしたりして…」

と言うと、

「姉さん！やめてください」

と言って、I Yが恥ずかしがった。

「…あの衣装は、この先の町の衣料品店でI Y自ら選んだものを買ったものだが、最初見た時は驚いた。でも、I Yが『丁度、収穫祭前の時期なので、この衣装を選んだ』と、言う様な事を言ったので、納得したんだが…」

とH Gが言うと、今度はT Tが

「あの衣装を見た時のI F隊長の仰天ぶりったら…」
と言って、笑った。

「あの『赤ずきんちゃん作戦』…もし、I YじゃなくてH Y先輩がやったとしたらどうな

りましたでしょうね？」

とI Aが言うと、

「多分、似合いすぎてたんじゃないかなあ…」

とH Gが答えた。その言葉に皆、小柄で童顔のH YがI Yの衣装を着ているのを想像して

「可愛いと私も思います。H Y帰ったら、I Yからこの衣装貸して貰ったら？」

とT Tが言うと、H Yは複雑な顔をした。

「質問です」

「なんだA M？」

「はい、そもそもI Yは、なんでこんな格好をする事になったんですか？」

「それはだな…」

H Gは「赤ずきんちゃん作戦」と言う、T YとI YのI Fの命令違反の名誉挽回として、I Yの斥候任務についての話をした。しかし、H Gは衣料品店の前でのI Yとの会話については話をしなかった。I Yはそのことについて（親父…ありがとうございます）と感謝した。

●I FとH Gの夫婦漫才の思い出

「赤ずきんちゃん作戦」の林を出発したH G一行。I Yの衣装を買った衣料品店のある町を通り過ぎて、かつてI F達と潜んでいた山中に移動する。

「ここで、俺とT TとH Yが、F子ちゃんとY M達民兵会社D Kの隊員達と出会ったんだ」

とH Gが話をしていると、隅に居たR Rが隣に居るT Yに

「F子ちゃんって…誰？」

「I F隊長の事です」

「…成程」

「そうでしたね、先輩。あの時は驚きました。でも、I F隊長と先輩の昔話が聞けて面白かったです」

とY Mが応じる。T Tも

「I F隊長と准尉の指揮権争いとか…」

と思い出し笑いをしていると、H Yが

「T Tは知らないけど、O 県領地に渡った後ね、I F隊長と准尉の夫婦漫才がまた見られたわ…それも二回も…」

「えっ？ホント？」

「わたしが退職する前、何度か本部内で見たことあるけど、久々に見たわね…って、あと後にフェリー埠頭でも見たけど」

「何ですよ、その『夫婦漫才』と言うのは？」

とT Kが訊ねると

「あつ、I F隊長と准尉の恒例のじゃれ合いです」

とH Yが笑って答えると、当のH G本人は

「なに言ってやがる！その内いくつかは命のやり取りだ」

とムスツとして言った。それ聞いてT Kは驚いた（I F隊長は、確かH G社長の元カノ…命のやり取りする程のじゃれ合いって…何なの？それとも、命がけでやる漫才？？でも『夫婦漫才』っていい響き…私もH G社長と夫婦漫才したい！（オイオイ！作者）と手を合わせ、自分とH Gが漫才をしている姿を想像した。

「そういえば、I F隊長がH Y先輩は、会社に居た頃は『軍曹待遇』と聞きましたが」とT Yが訊ねると、H Gが

「H Yは『軍曹待遇』になって一分隊を率いるまでになったよ」

と言うと、H Yが

「まあ、それで任務に失敗して損害を出した責任で会社を退職したけどね」

と、続けた。それを聞いたT Yが

「あ…やはり、隊長の経験があったのですね」

と、納得すると、H Yは更に

「なった初陣で、損害出したけどね」

と、H Yが複雑な表情をして言ったのを聞いて、H Gは（H Yも過去の事を、人に言えるようになったな…）と思った

…民兵会社では、階級概念はなく、部隊は指揮官とかリーダーとか知識や経験で選ばれた者に部隊指揮権が与えられ、その配下に複数の部下が付けられることで構成される。しかし、正規軍と連携して行動する時には、指揮系統に問題が生じるので、正規軍に対して便宜上名乗る階級がある。作者

「ここで合流してから直ぐにO県領地に一時期撤退したんですか？」

とI Aが訊ねると、H Gは首を横に振って、

「ここからが、色々調査を始めるきっかけになった…最初、T TとH Yと三人でこれから行く温泉宿で話し合った仮説がある程度固まるまで、ここを拠点にして、F県領地のあちこちを調べて回ったんだ」

と言うと、横でY MとT Tが頷いた。

「そうなんですね。移動はどうしたのですか？」

「それは、わたしの車よ…部隊は本部からトラック持ち込んでいたけど」

とH YがH GとI Aの会話に入る。

「えっ？H Y先輩…車って？」

「わたしの当時の実家は、隣のS県領地にあったの…そこからF県領地に買い物に来て准

尉とT Tと出会った事は、バスの中で話したわね」

「エッ？HYさん、車の免許お持ちでしたの？」

とM Zがわざとらしく言った。

「何を言う！」

HYがムツとして答えた。

「成程です。地元のHY先輩の車で移動したのなら、短時間でこのF県領地を見て回る事ができますね…」

とI Aが納得して言うのと、

「HY様のお車だと小回りが利きそうですしね」

とM Zがまたちよっかいを出すと、

「そーよ、軽ワゴン車だったわよ！」

HYがM Zに食って掛かる。I Yは

「この時、私とTY先輩は、一旦渡ったO県領地で本部の命令を受けて引き返して、ここで准尉達と合流しました」

「そうね…大変だったわね。I F隊長に『あんたたち、帰ったら軍法会議！あっちへ行け！！』と怒鳴られたし」

と、TYも続けると、HGが

「まあ、F子ちゃんの肩を持つわけではないが、F子ちゃんがお前達をO県領地に行かせたのは、正解だよ」

「」

「そうよ、あなた達知らなかったかもしれないけど、F県領地一帯携帯電話が使えなくなっていたから…」

とYMが言うのと、

「そうなんですか？」

「地元警察が通信網を抑えたと准尉は推理してたけど、本当だったわ」と、T Tも言った。

「…さて、ここは重要な場所ではあるが、何もないので、温泉宿に向かう」とH Gが切り出す。

●山中の温泉宿

最初の宿泊地である山間部の温泉宿に向かう。途中ドライブインに立ち寄り休憩する。

「ここでは、俺とT TとH Yが事件当日、市街地で見た事を最初に整理したんだ」

「そうでしたね…でもあの時は結局まとまらず…」

とT Tが応じた。

「温泉宿で再度話し合いをして、これはテロじゃなくてもっと別の事件で、結果核再処理施設のM O X燃料強奪事件だと仮説が整いましたね」

とH Yが言うと、T Tが笑いながら

「でも、そこにたどり着くまで大変でしたね…ここでは、私達が“未知のウィルス”に感染したとか出たりして…ウフフ」

「「アハハ！」」

「そうだったな、温泉宿である程度仮説を立てて、翌日F子ちゃんとY M達と合流し、そこでY Mを借りて再度市街地を見て回り、爆破現場が他社の民兵会社の事務所と言う事と、Y Mから本来のスケジュールとか、O県領地の海軍の連絡でF子ちゃん達がこっちに來た事とか…今まで知らなかった事実を知り、またその途中でラジオから聞いた帝都の近衛師団が北の海岸の海岸に上陸したが行方不明になった事を聞いて見に行ったりしたな」

「近衛師団が上陸して行方不明になった…そういえば、その当時ニュースでそんな事言ってたな」

とRRが言うと、HGは

「で、見に行ったら、C国の兵士と捕虜になった皇国側の近衛師団の兵隊を見つけて驚いたよ。それでC国の関与を知ることになった」

「へーえ」

「先に種明かしをするが、後日海軍の情報課のOJ少尉から聞いたんだけど、C国の兵士は、C国反政府組織の兵士だったんだ」

「そうなんだ…そいつらがMOX燃料を強奪しようとしたんだ」

「結果的にはね」

「…あつ、わりい！このツアーの主旨を無視しちゃった」

と、RRがすまなそうに謝ると、HGは（RRの先祖の母国の事だから、心配したんだろう）
と思ひ。

「いや、いいよ。話を戻すと、YM達と市街地と北の海岸を見た結果を元に再度、あそこのコンビニの駐車場の車内で検証して、ようやくC国…まあC国の反政府組織がMOX燃料を強奪しようとしているとの仮説がまとまったんだ」

一行は、ドライブインを出発して、今夜宿泊する温泉宿に着いた。

温泉宿の部屋割りは、

・男共 HG、SK、II、AM

・RR一家

・弟子共 HY、IY、TY、IA、MP

・飛び入り　M Z、E Y、N A、K T

・従業員とゲスト　T K、T T、K M、Y M、S M

T TとT Kは部屋割りに不満たらたら…同室になったY Mはオロオロするばかり…

「以前、F県領地の事件でここに来た時には、准尉と一緒に部屋だったのに―」

とT Tが悲しそうに言うと、T Kは驚いて、

「何ですって！聞き捨てならないことですわ」

「あの時は、准尉の妻と言う役で、H Yは私達の子供という設定でしたので…」

「まあ！（キー、悔しい！）」

と、T Kが言うと、Y Mが「まあまあ…」とT Kをなだめる。T Kはハタと、（Y Mさんは、

H G社長の大学の後輩…K MさんはH G社長の従姉…これは、H G社長について色々伺えるチャンス！）と考え、

「そつ、そうですね…今日は楽しい慰安旅行ですから…ここでは楽しく過ごしましょうね」

「あらあ…お珍しい！（あなたの魂胆はお見通しよ…私もですけど…）」

とT Tが煽るように言うと、T Kは、カチン！（怒）ときた。

●ドキッ！女だらけの欲情…もとい！浴場。ポロリもあるよ

食事前に宿の露天風呂に入るH G達…

女湯では、H Y達碇屋の娘達は、M Pについては白山亭母屋の風呂場で見慣れているので、何も感じていないが、他の女性陣は、M PとM Zの肢体については、同性でも興味深々…

「温泉はやっぱいいわね―」

と言って、H Yは湯船に思いっきり体を伸ばす。I Yは、湯船から見える景色を見ながら、

「そうですね姉さん…この温泉ですね…弟子入り初日に私に自慢していた温泉は？」

「そーよー」

「でも、自慢した場所も白山亭の近所の銭湯の温泉でしたね」

「アハハ！そうね」

とH YとI Yが会話している所に、

「I Y…それで、ここに来たいと言ったのね」

とT Yが加わる。

「はい、あの時凄く楽しそうに姉さんが自慢してたので…」

「そういえば、母屋の風呂場使えるようになって、近所の銭湯に行かなくなったわね」

とH Yが言うと、I Yも

「そうですね…たまには行かないといけませんね」

「近所に銭湯あるの力」

とM Pも加わる。

「あるわよ。鉱泉の沸かし湯の温泉がある銭湯が」

「それは、知らなかった…帰ったら早速行くネ」

「M P…温泉好きなの？」

「ハイネ、学生時代、風呂ナシの寮住まいで、M Zと一緒に銭湯行ったネ」

と、M Pがポロリと言うと、聞いていた皆

「『そーなの？』」

と驚いた。

「ハイネ」

「ちよつと、M P！あなた、なに暴露してるの！私の品位を貶めないで下さる？」

「ソンな事言つて…入寮当初、風呂屋で入り方分からなくて、常連のお婆さんに注意受けた

のダレカ」

「やめてー」

普段は白山亭店内で、MPをからかっているMZは、この時は立場が逆転した。

「MPって、店ではMZの毒舌にやり込められて、すぐに真っ赤になって怒るけど、意外とMZの弱点握っているかも…恐ろしい娘」

と、TTが呟いた。

●親父争奪戦

当初の予定では、宿の部屋でゆっくり食事につくつもりだったが、思わぬ追加人数で、広間で食事するハメに…

広間でAMが司会を買って出る。

「本日は、白山亭と碓屋…と、ゲスト多数の温泉旅行になりました…」

と言っている最中にHGが

「いよ！芸人AMの本領発揮か！！」

と茶々を入れる。

「違います！」

「[[「アハハ！」」」

「えゝ、仕切り直しを…本日は、白山亭ならびに碓屋と、ゲスト多数の楽しい温泉旅行の初日です。」

「[[「イエーイ！」」」

「社長、一言」

「うむ」

と言って、HGは立ち上がると、

「まずは、白山亭ならびに付属の母屋、男屋の改装費用が返済できました事をご報告します」

「「ヤッター！」」

「これは、ひとえにここに居る、私の弟子達と白山亭ならびに碓屋の…また今日は残念ながら、この旅行に参加できない人達を含む、社員・パートアルバイトの人達の日頃の働きによるものです。また、日頃御贔屓にいただいているお客さん達のお陰です。ここに日頃の感謝の意味で乾杯をします」

「皆さん、コップに飲み物はいき渡りましたね」

「では、乾杯！」

「「カンパーイ！！！」」

「後は、料理とお酒をお楽しみください。なお、カラオケなどここにはありませんので、皆さん、ごゆっくり…」

とA Mが言った。

皆出された料理に舌鼓を打つ、特にシェフのS Mは、食材とか調味料とか出汁加減とか、食材の調理について、興味津々…一つ一つ料理を見て、口に入れて味わいながら、あれこれとブツブツ呟いていた。その隣で鬱陶しいと思いつつ箸を進めるK MとS Mの言葉に頷いて、時には意見を交わすT T。

元々、静かに飲みたいH G…そこに女性達が次々に酌をしようと迫ってきた。誰が最初にお酌をするかでもめ出し、ジャンケンとかH Gとの付き合い順とか言い合いになった。それを聞いて、H Gが

「チョッ、待てや！料理を食わせろ！」

とH Gが言うと、

「そうですよ」

と言う声が掛かり、酌をしようとした女性達が声の主を見ると、そこには、ちゃっかりH Gの右隣に徳利を持って座っているH Yが居た。皆口々に「H Yなら仕方がない」と言うような事を言って、素直に一旦引き下がった。

●こんな所にF子ちゃんが…復活！夫婦漫才

それでも、次々に徳利を持って、お酌に来る女性達…H Gは黙ってお酌を受けていたが、注がれる醸造酒が美味しいので、追加の徳利を持って来た仲居に、「美味しいお酒ですね、地元のですか？」と訊ねると、仲居は「いいえ、違いますよ。お客様達がB県領地からおいでとの事で、醸造酒をお出ししました。地元の方は蒸留酒を御所望いたしますので…」と答えると、H Gは「どこのですか？」と訊ねた。仲居は「少々お待ちください」と言って、徳利の乗ったお盆を置いて部屋を出て、暫くして「このお酒で御座います」と一升瓶をH Gに見せた。H Gは「…どれどれ」と言いながら、一升瓶に貼ってあるラベルの銘柄と蔵元を確認した。その横から酒好きのH Yが一緒になって覗き込む…

「H Y…」

「はい…」

「これって…あれだよな」

「はい、そうですね」

と二人してラベルを見ながら言っていると、仲居が

「あつ、丁度今日その醸造酒の蔵元の方がいらしまして、私はその瓶を持ち出そうとしたら、お客様にお会いしたいと仰いまして…廊下に控えております」

と仲居が言うと、H GとH Yは身構えた。

「本日は、当蔵元の醸造酒を御所望頂き、ありがとうございます」

と廊下で正座して畏まっている人物の姿を見て、H GとH Yは抱き合ってしまった。

「…F子ちゃん？」

とH Gが言うと、畏まっていた人物は顔を上げた。そして

「なんだよ、H G。お前さんかい！」

と言った人物は、I F。

「なんで、ここに居るの」

「それは、あたしのセリフだ。畏まって損した」

「あー、I F隊長！」

「なんだーY Mも居るの？」

「はい、お久しぶりです」

この会話に、T TとH Gの息子娘共はM P（D国人です。I Fの事は知りません）を除いて皆驚いた。H YからI Y・I Aに至るまでI FとH Gとの仲を知っていた。ましてや、移動中にH GとI Fとの夫婦漫才の話を聞いていたので、余計である。

「F子ちゃん、なんでここに？」

「こっちの地域じゃ、ウチのお酒の売り上げ悪くて、副社長のあたしが自ら売り歩いてるのよ」

「そりゃそうだろう…ここの土地は、醸造酒より蒸留酒が多く飲まれている。俺がこっちの大学に居た頃、下宿で地元の人達が『醸造酒？そんな生臭いモノ飲めるか！』って言われたよ」

「そーなの？」

「F子ちゃん、ちゃんとマーケティングしてる？副社長でしょー」

「うっ、うるさいわね」

「そーいや、F子ちゃん退職後にウチに送り付けた角樽の中身、生酒だったよな」

「そーよ…なにか文句あるの？」

「あるぞ、着払いで送り付けやがって…それはいいとしても、送り付けられた当日、丁度ここに居るY Mがご家族で帝都への旅行のついでにわざわざウチの店に寄ってくれて、F子ちゃんが送り付けた角樽の酒をY Mと旦那さんに飲ませたら、拒絶反応起こして…(Y Mが「嘘ですよー、醸造酒を普段飲みなれない夫が生酒飲んで酔払っただけですよ」と慌てる)

慌てて母屋に運び込んで…姪のH M(看護師)が応急処置して…(Y Mが「それも嘘ですよー」と首を横に振る)」

「えっ？ そうなの！」

と驚くI Fに、H Gは

「開けちまったから、すぐにみんなで飲んだんだけど、空け切らなくて、勿体ないけど残りは店の料理に使わせてもらった」

「…酷いわね！ その落ち…じゃ酒樽の方は？」

と、I Fは呆れて、訊ねると、

「あれ？ どうしたんだっけ？」

と言って、H Gが首を捻ると、

「准尉、あの酒樽は店内に一時置いてありましたけど、邪魔だと言う事で、准尉が地下の倉庫に持って行きましたよ」

とT Tが言うと、

「あつ、そーだった！」

「飲まなかったんかい！(怒)」

とI Fが怒ると、H GはI Iに手招きして、

「おい、I I」

「はい、社長」

「うちの店の地下倉庫に大きな酒樽まだあったか？」

「はい、どうしてよいか分からないので、あのまま置いてあります」

「あれの中身は、この醸造酒と同じだよな？製造元のF子ちゃん」

「F子ちゃん言うな！…そうだよ」

「…だそうだ。この酒どう思う？」

と、HGはIIに一升瓶を見せると、

「はい、大変美味しいです。地下倉庫は外国の醸造酒とかの保管に適した温度が保たれていますので、店に帰ったら、開けて確認の上で店に出しても大丈夫なのでは？」

とIIが言うのと、IFはIIを指差して、

「HG、誰こいつ？」

「彼はIIと言って、俺の政府軍時代の部下…除隊後Barでバーテンやってたのをスカウトした。今、夜のPub営業任せてる」

「そーなんだ…あんた、もっと早く白山亭に来てくれたらよかったのに…HGの入れるカクテル不味くて…」

と言って、如何にも不味そうな顔をした。

「何だと！」

HGとIFのやり取りを初めて見た人達…（…こつ、これが、有名な夫婦漫才？）と思い、その中で特にAMは、HGとIFの事を知っているが、民兵会社に居た期間が三年間と短い、ため、夫婦漫才を見た事が無かったので、

「あのーHY姐さん、これが有名な夫婦漫才ですか？」

とHYに聞くと、HYは笑って、

「うーん、ちよつと違うわね…こういったパターンもあるけど、やっぱりあの二人の夫婦漫

才は、拳銃を使ったやり取りよ！」

と言うと、それを聞いた人達は（拳銃を使ったやり取りって…ナニ？過激なモノ？？）と思った。

●月夜の思い出の部屋

F県領地の事件発生当日H G達が宿泊した部屋は、今日はH Y達が泊まる部屋…T T、T K、Y MがH Y達の部屋を訪れると、E Y、N A、K Tが先に来て、T Y達とカードゲームに興じていた。

T Tが部屋を見回して、

「確か…この部屋だったわね…私達が泊まった部屋は」

「そうね」

とH Yが応じた。

「この部屋にくるなり、いきなり准尉が小型ドローンとヘッドマウントディスプレイのセッティングを始めて…呆れたけど、准尉の考えを知ったら、三人で手分けして小型ドローンとヘッドマウントディスプレイのセッティングをしたわね」

「…そうだったわね(笑)でも、おかげで色々役に立ったし、これ以降も何度か使ったし…」と、H Yが言うと、

「部屋で、わたし達が遊んでいる、あれ（小型ドローン）の事ですか？」とI Aが訊ねると、

「そうよ…最初市街地で准尉が沢山買い込んでわたしの軽ワゴン車に積み込んだのを見て驚いたわ」

「その後、温泉に浸かったのだけど、部屋に戻ったらまた、情報の検証始めたわね(笑)」とT Tが言うと、

「そうそう…それでやっと、ある程度まとまって、本来味方であるはずのF県領地の正規陸軍と県領地警察が敵に回ったのを知ったわね」

「そうね」

「また、夜中にも話をしたっけ」

「あの夜は、綺麗な月だったわ…」

HYとTTの話を聞いて、TKは（なにがあつたの？）と思った。

「准尉がラジオ聞きながら、情報収集して、准尉がその意味を分かり易く教えてくれたわね」

「あつ、先輩がO県領地正規海軍基地内で披露した、ノイズの話？」

とYMが応じた。

「そうですよ…あの話、海軍基地でしたのですか？」

とHYが訊ねると、

「ええ…、そのおかげで、先輩は海軍基地から信頼を得て、協力を得られたようなモノだったから」

「へえー、そんな事が…」

YMとHYは共に大学の電気・電子学部と通信工学部の出身なので、意味が通じた。

「そうか、海軍基地に行ったのは、先輩と私だけだったし」

とYMが言うと、HYが

「それで、漁港に帰って来た時、行きは徒歩だったのが、帰りはトラックに食料と装備沢山載せて戻ってきたんだ」

「そうよ」

それを聞いていた、TKは（HG社長…そんな凄い事したのね…それがわかるって、理系は凄いわ）と感心した。

「准尉が深夜に苦勞して、収集した情報が役に立ったんだ」

とH Yが言うと、T Tも、

「そうね…その後で准尉が持っていた上物のブランデーの入ったスキットルを回し飲みして…」

「そうね、T Tが『まるで義兄弟の杯ね』…とか言い出して」

「やめてよ、H Y…恥ずかしい」

恥ずかしがるT TにT Kは（キー、悔しい！）と嫉妬した。

「…ところで、親父は？」

と、H Yが訊ねると、

「皆さんがお酌するので、酔いが回って部屋で倒れているとA Mから聞きました」

と、T Yが笑って言うと、H Yは赤面して

「皆さん…あつ、明日はお酌するのを控えましょうね」

「『ハハハ（苦笑）』」

●狸と貉の亡霊

翌日、海岸の温泉地に移動したH G一行。今日の宿泊先は、F県領地の事件で、あの〃狸と貉（前外務大臣とC国大使）〃が巢食ってた旅館…

H Gの息子娘共と若者達は、旅館に荷物を置くと、温泉街に繰り出した。

H Gは、ロビーでパイプを燻らしていると、R RがR Lと来たので、

「あれ？R Rは温泉街を散策しないの？」

「ああ…こういう所は散策してもなあ…L」

「そうね、あんた」

と言って、H Gの座っているソファアの向かいに座る。そこに、Y MとT TとT Kが来た。

Y MはH Gを見つけると、近づいてきて、旅館のロビー内部を見回すと、

「よく、この旅館予約取れましたね…この旅館って、あの『狸と貉』が居た旅館ですよ？」

と、当時『狸と貉』の捕獲作戦に居なかったY Mが訊ねると、

「そうだよ、俺とF子ちゃん達が捕まえて、そのままO県領地の海軍さんに引き渡した。予約には、その海軍のO J少尉に口を聞いてもらった」

とH Gがシレっと返した。

「O J少尉って、フェリー埠頭の事件（『巻き込まれ親父の突入』参照）の後で白山亭にいらした方ですよ？」

とT Tが言うと、

「そう、Y Mを大変な目に遭わせた張本人…」

と、H GがO J少尉の事を悪く言うと、

「先輩、あの時は助けていただき、ありがとうございます」

とY Mが頭を下げた。

「何ですか、その『大変な目』と言いますのは？」

と、T KがH Gに訊ねると、

「それは、このF県領地の事件で捕まえた、事件の黒幕である前外務大臣と前C国駐皇国大使…我々関係者は当時『狸と貉』と言うコードネームで呼んでいますが（笑）…ここから帝都に護送するのに、かつて私が居た民兵会社に対岸のO県領地正規海軍基地からの依頼があり、ここから帝都行きのフェリーを使って、当時この支部長の彼女（Y Mを指して）を護送任務にあたらせた所、フェリーがC国反政府組織の工作員に乗っ取られて、彼女とその部下達が人質に取られて…」

「はい、それで乗っ取られたままY国際港に入港したフェリーに対して、人質奪還作戦を指揮したのがH G先輩なのです」

とY MがH Gを称える。

「まあ、そんな事が…」

と言つて、T Kが驚いた。H Gは続けて

「この時、同じフェリーに人気歌手のI Mさんのツアー一行が乗船していて、そのI Mさんの海浜アリーナでのコンサート中の警護が、当社碇屋が請け負った最初のエージェントの仕事でして…私とH Yがフェリー埠頭の岸壁でI Mさん一行を待っていた時に、その『狸と貉』の護送を引き継ぐべく、帝都本部のI Fとその部下達と鉢合せをし、フェリーが乗っ取られた事が分かったので、お互い協力して人質奪還作戦をしました…おかげで、I Mさんの所属している芸能事務所から信頼を得て、以後I Mさんの警護任務にI Yを付けたら、ゴシップ雑誌に載るほどの仲にまでなつて、I Mさん自らも個人的な依頼も来るようになりました。また同じ事務所の他の芸能人の警護任務も多く請け負う様になり、碇屋の売り上げが伸びて、白山亭と他の建屋の改修費の借金全体の三分の二を賄うまでになりました」

「I Mさんの事については、あの事件のテレビ中継で盛んに報道していたけど、その裏にはそんなことがあったのね…」

とR Lが言うと、

「『狸と貉』の護送は、海軍独自で行った事らしい…当時港町署（港町警察署）と水上署（港町水上警察署）の署長達も港湾局の誰も知らなかったと言つてたから、マスコミも知らなかったみたい…でも、その後で報道管制を敷かれたと思うよ」

と、H GがR Rの妻R Lとも気さくに話しているので、T Kが

「R R様と、H G社長の間柄って…？」

と訊ねると、

「はい、R Rとは子供の頃からの友人であり、またそれぞれの曾祖母の頃からの付き合いがあります。以前、Y国国際港にいらしたときに、『茶癒庵』と言うC国の特産品を販売していた、またC国のお茶とお菓子が楽しめる店に案内しましたね」

「はい」

「その『茶癒庵』は、R Rの会社のR交易商公社直営の喫茶店です」

「あら…それでは、商売敵でもありますのね」

「そうですね…白山亭では『茶癒庵』のお茶とお菓子をメニューに載せていますし、レジ横のお土産コーナーにも、『茶癒庵』のお茶やお菓子を置いています。一方『茶癒庵』でもウチに遠慮しているのか、喫茶部で出しているブレンドコーヒーは、ほぼ白山亭オリジナルコーヒーですから…」

とH Gが言うと、R Rも頷く。

「えっ？そうなんですか？准尉」

とT Tが食いつく

「そうだよ、白山亭オリジナルコーヒーのコーヒー豆の配合は、俺の曾祖母と、R Rの曾祖母が試行錯誤して決めたんだ。R交易商公社で仕入れた各地のコーヒー豆は、R交易商公社社内で曾祖母のレシピ通りに配合されて、ウチに卸される…だからウチ（白山亭）のコーヒーの豆の配合については、俺よりR Rの方がよく知ってる。それから、『茶癒庵』のブレンドコーヒーは、ウチの配合に近くしているが、コーヒー豆の入荷状況によつては、ウチのブレンドに豆を優先してくれて、まれに配合が変わっている時がある」

「オイオイ、H Gそこまで言う事無いじゃないか！」

とR Rが言うが、顔は笑っていた。

「たまに飲むと、ビミョーな違いが出ている事があるんでね」

「そこまでわかるか？」

「そりゃー、俺のお婆さんの淹れたコーヒーを子供の頃に何度も飲んでいるからな」

「フハハ」「ハハハ」

「良いご友人関係ですね」

とTKが嬉しそうに言うと、HGとRRは

「はい」

TKが、

「白山亭と言えば、あの可愛い女給服が目を引きますわね。以前Kお嬢様が夏休みの社会勉強で着用なされた時は、もの凄く可愛くて…Yお嬢様と一緒に仲睦まじく働いているお姿を見ると、私胸がキュンとしてしまいますわ」

と言うと、TTも

「そうですね、Kお嬢様は本当に可愛らしくて…私も娘に早く着せてみたいです」

「あら、お嬢様は？」

「はい、まだ中学生で…」

「そうですね、成長が楽しみですわね」

「はい」

と、この意見は本音の部分で珍しく一致するTTとTK。

「人気歌手のIM様も店にいらしたときには女給服着て店内にいらつしゃることがあるそうで…確か店内にIM様をモデルにした絵がありましたわね」

とTKが言うと、今度はHGが

「ええ、IMさんの事務所の他の芸能人の方も当店の女給服を着ていますよ」

「そうですね？それではアルバイトの応募者はかなり来るでしょうね」

「はい、フェリー埠頭の事件以前は、姪のHMとの看護師仲間のアルバイトだけでした。フ

エリー埠頭の事件で港町署と水上署の女性警察官の方達に加勢をお願いしたら、白山亭の女給服が着たいと言うだけで定員を上回る人数が来て、それ以後、休日とか手が空いている時にアルバイトをしてくれるようになりました。KTがその一人です。他にも、港灣局の人達がアルバイトに入ってきました。その後、BSAT創設に関わらせて貰ったご縁で、NAを始めとする機動隊とBSATの女性隊員の方もアルバイトに来るようになり、また、最近ではEYとその友人の海兵隊員まで加わって…今ではアルバイトの人数が多すぎる状況なのですが、彼女達には本業がある関係上、アルバイトが短時間とか一日とかのスポットで、また彼女らの本業が元々変則勤務の都合でシフトは回っていると言う…これも、ひとえにアルバイトのシフトを切り盛りしてくれるTTのお陰です。TTありがとう」と言って、HGはTTに頭を下げた。

「あら、准尉…勿体ないです」

「いや、女給には普段弟子の息子娘共が常に誰か一人か二人は入っているけど、こいつらが任務で抜けた穴を即座にアルバイトで埋める事ができる腕前は凄いと言うより他にない。

俺には出来ないね。TTが居なければ、白山亭の女給達のシフトが混乱する」

「あらー、そうですか。褒めていただき、ありがとうございます。でも、そのアルバイトの娘達に、母屋を提供している准尉の懐の深さには、かないませんわ」

「どういう事ですか？」

と訊ねるTKにTTが

「准尉は、以前はHMさんの看護師仲間に母屋の一室を夜勤前後の仮眠とか休憩に使うために無償で貸していました。今では、先程の警察関係者の女性の方々にも同じ目的で貸していますし、また風呂も貸しています。さすがにお風呂は使用料金を徴収していますが、アルバイトの前後の入浴や風呂掃除をしてくれた娘達からは徴収しませんし…」

「ま、清潔が一番…俺もガンスミスの工場からそのまま白山亭店内に入ろうとしたら、アル

バイトの女給に止められた事があったからな」

とH Gが苦笑いして言うと、

「そうでしたね」

とT Tが笑って応じる。T Kはそれを聞いて（私も母屋に泊まってみたい…H G社長と一つ屋根の下…ウフフ）と想像した。

●バーラウンジで

その晩の夕食の席は、宴会場に設けられたテーブル席での他の宿泊客と一緒に食事。

流石に昨日の様に行かないので、皆隣の席の人達と会話しながら食事をとった。

ここでの部屋割りも、前日の山中の温泉宿と同じ…他の人の部屋に行ってカードゲームに興じていたり、部屋で酒盛りしていたり、娯楽室でテーブルゲームやテーブル球技（こちらの世界での卓球の様なもの）に興じていた。

H Gは旅館のバーラウンジのカウンターで一人酒を片手にシガーを燻らせていた。そこにS Mがふらりとやってきた。

「あら、社長。お一人ですか？」

「ああ、部屋ではS K達が卓ゲーム（こちらの世界での麻雀の様なもの）を始めたんで、静かにタバコが吸えないのですね」

「そうですね…じゃ私も」

と言って、S MはH Gの隣に座るとポーチからミニシガーを取り出して火をつけた」

「あれ？君タバコ吸うんだ」

「はい、仕事中は味覚が変わるので、吸いませんが、仕事終わりとか、休日には吸いますよ」と言って、H Gと話を始めた。

暫くして、H Gの姿を探して、T TとT Kが別々に旅館内を歩き回って、バーラウンジの入り口でばったり出くわした。

「あら、T Kさんどうしました？（どうせ、准尉を探してたんでしょ）」

「あら、あなたこそ（H G社長を追いかけていたのでしょ）」

「私はH Y達の部屋に居ましたが、あの子達のカードゲームのノリについていけなくなつて、ここで飲もうかと」

「あら、奇遇ですわね。私もここで静かに飲もうかと…」

とお互い見合つて、

「では、入りますか？」

「そうですね」

とT TとT Kがバーラウンジに入ると、カウンターに居るH GとS Mの姿を見つけて驚いた。

「…あら！」「まあ！」

二人供、自分達がH Gの姿を探し回っている間にS Mに横取りされたと勘違いして、音を立てずにH Gの後ろに行き聞き耳を立てると、H GとS Mの会話の内容は、F県領地の食材や蒸留酒の仕入れとか地元料理について意見を交わしているのを聞いて、安堵するのと同じ時に、邪な考えを持った自分自身を恥じた。

「准尉、隣よろしいですか？」

とT Tが優しく声をかけると、

「おや、T T…それとT Kさん…二人して、珍しい」

と言うと、S Mが気を聞かせて

「じゃ、社長。私は席を移動しますね。食材の仕入れについては、帰ってからまた…」

「そうだね…RRに話をしてみよう」

「はい」

と言って、SMはHGの隣を開けると

「どちらか、どうぞ」

と言った。TTとTKどちらがどこに座るかで見あっていると、

「俺とSMさんは喫煙者だ。その間で構わないのなら、こちらへ」

と言うと、TKが

「私もタバコを吸いますので、遠慮なく」

と言うと、HGとSMの間に座り、HGの反対側の席にTTが座った。

TKがポーチから、シガレットホルダーとミニシガーを取り出すと

「ほう、TKさんもミニシガーを？」

「はい、仕事中は侯爵様が喫煙をしないお方なので吸えませんが、自室で吸っていますわ」

「そのシガレットホルダー、かつこいいですね。わたしもシガレットホルダー買おうかしら

…」

とSMが褒めると。

「あなたの様に料理をお仕事にしている方は、服にタバコの香りがつくとか何とかありますので、いいと思いますわ」

と言って、シガレットホルダーにミニシガーを挿して火をつける。一服して、TKはHGの手元のシガーを見て、

「HG社長は、普段はパイプだそうですが、今日はシガーですね」

「ええ、このバラウンジのヒュミドルに珍しいシガーがありましたので」

HG達のタバコの話に置いてかれたTT、手持ち無沙汰になり、カクテルを注文した。

● I YとH Yの弟子入り宣言の地

慰安旅行最終日：F県領地の市街地に戻ってきたH G一行。

I YとH YがH Gに弟子入りを迫った場所に行き

「F県領地の事件解決後、ここで私が最初に准尉に弟子入りを申し出ました」

とI Yが言うと、H Yが

「あの時の、I Yの発言：『准尉。わっ…わたしをかって下さい！』…って、わたし最初“かって下さい！”の意味が分からなくて…生き物を“飼う”の意味なのか、モノを“買う”の意味なのか分からなくて…結局、生き物を“飼う”の意味に取ったけど…そー言う事じゃなくてI Yは自分の能力を“買って”くれと言う意味だったわね」

と言うと、I Yは

「姉さん…やめてください！」

と、顔を赤くした。H Yは更に、

「それに対して准尉は『俺はロリコン趣味はない』なんて言ったから、最初、准尉は生き物を“飼う”意味に取ったみたいだけど…I Yが改めて『言葉通りです…私を“買って”下さい』って言い直したら、准尉もI Yの身売りの事…って、今考えるとおかしいけど…そう考え直して、『お金はない』って言ったら、I Yが『じゃ、弟子にしてください！お金はいりません』とか言って、弟子入りを宣言して、後は『弟子は取らん』『じゃ、押しかけます』って言って准尉にしがみつくし…その後、I F隊長とY Mさん達との飲み会にまでついて来て、席に割り込んでお酒を飲みながらずっとその話ばかり…で、最後根負けした准尉が『分かった！弟子入りして後悔するなよ！めんどくせー』と折れたら、その場で酔いつぶれて…」

と、H Yが言うと、H Gは呆れて、

「よくそんな事覚えてるなH Y」

『『そんな事』じゃ、ありませんよ！大切な思い出です』

と言つて、H Yはむくれた。I Yは

「姉さん…もうやめて…」

と、言つたが、ハタと

「あつ、姉さん相変わらず自分の都合の悪い所、端折りましたね…H Y姉さんも、私が最初に弟子入りを宣言して、准尉にしがみついたら、『じゃ、わたしも！』って、一言言つて准尉に詰め寄りましたね。姉さんその一言で准尉に弟子入りして…その後の飲み会も私同様についてきたし…私と准尉のやり取りにチャッカリ乗るなんてズルいです」

と言うと、H Yは

「そんな事無いわよ！あの時は、あなたの事が心配で…それに、飲み会はわたし、准尉と一緒にI F隊長とY Mさんから初めから招待されてたもん！」

H YとI Yが言い争いを始めたので、H Gは

「これ、二人供いい加減にしない…H Yは、俺とY M達とで飲みに行く予定だったよ。それにこの話は、白山亭で十分話し合つたろ？」

と言うと、I YはT TとY Mが頷いている（Y Mは飲み会の事だけです。作者）のを見て、

「H Y先輩…その先は、白山亭の母屋とかB S A Tの初出勤の時にトコトン二人で言い合いましたから、ここでやめましょう！（『巻き込まれ親父の狙撃』参照）」

「…そうね…」

とお互い、この先の話は、H GとT T以外の他人には言えない深い傷がある事を知っているので、H YとI Yはお互いに目を見て頷くと、苦笑いをした。

「ホント、よくまあ、細かい事まで覚えてるなあ…」

とH Gが頭を掻きながら言うと、一同笑った。

T Kは、（ここが、Yお嬢様がH G社長に弟子入りを宣言した場所…あの頃のお嬢様の性

格からしたら、随分思い切ったことを…いや、お嬢様だったから、しでかしたと言うべきかしら…いずれにせよ、お嬢様がH G社長の所に弟子入りしなければ、私の命の恩人であるH G社長との再会もなかったから、ここはお嬢様に感謝致しますわ」と思って、微笑んだ。

●事件かい！

帰りの帝都行き夜行列車まで時間があるので、駅での集合時間を決めて、それぞれ、お土産を買ったり、市街地観光に向かった。

H GとT Tは最初に再会した海沿いのホテルに向かい、それから国際港に向かった。それには、碇屋の息子娘共とH Gに弟子志願のE Y、N A、K TとT Kが加わっていた。

K MとS KとS Mは、Y Mの案内で市街地を観光した。

R R一家は、それとは別行動をとり、市街地を見て歩いていた。R Rの目的は、市街地観光の他に、R 交易商公社の現地職員と会うため。

F 県領地の市街地で、C 国反政府組織の工作員を見かけたR Sは、

「おとーさん、あれ」

と言って、R SがR Rの袖を引っ張る。

「何だ？」

「あの人…確か手配書にある」

「あつ、あいつC 国の反政府組織の工作員の親玉…こんな所にノコノコと」

「おとーさん、どうする？」

「どうするって…本国から手配されてるんだ。見つけた限りは捕まえないと！おい、L」

「はい、あんた」

「お前は、H G達を追いかけろ！俺はSと奴を捕らえる。集合時間に間に合いそうになかった場合は、H Gには、買い物で寄り道して後から帰るとも言つていてくれ」

「はい」

R Rは娘のR Sと共に、C国反政府組織の工作員を追跡する。普通なら、巧みに追跡を巻かれるところが、今回は相手が悪かった。R RとR S親子の連携で、交互に入れ違いながら、追跡を続けた。

そして、F県領地国際港のとある雑居ビルにたどり着いた。

「…ここか…」

と言って、見上げるR Rに手招きする人影が見えた。R Rはすぐにその人物に近づく…金龍公舎の現地職員だった。

…R 交易商公社には、金龍公舎と言う皇国内でC国物産を扱うための独特の情報網があります。作者

「R R社長、こちらに旅行とは聞いていましたが？」

「ああ、その途中で手配の工作員の親玉を見つけて、つけて来たんだ」

「そうですか、私も、最近このビルに手配の工作員の親玉が潜んでいるとの情報を得て張っていました」

「そうか、ご苦労」

「どうしますか？」

「ここに来たのも、何かの縁だろう…俺が捕まえる」

「そう来ますか…でも、あの雑居ビル全体が連中のアジトらしいです」

「そうか…で、どのくらい居る（アジトの工作員の人数）？」

「ざっと、三十人は下らないモノかと…」

「…そんなにか！」

「はい、ですので、地元の者（金龍公舎の現地職員）でも、とても太刀打ちが出来ない勢力

なので、社長に報告して近辺の同胞から加勢を頼もうかと…」

「今、何人集められる？」

「五人が関の山です」

「そうか…仕方ないな、H Gの手を借りるか…」

「H Gさん？あの方も来ているのですか？」

「ああ…この旅行、H Gの碇屋の連中のだからな…それに付いてきた」

「そうだったんですね」

と、会話している間に、R Sが合流した。

「これは、S お嬢さん」

「おとーさん、この人誰？」

「俺の組織の要員だ。俺は、これからH Gと合流する。S、この人と一緒にここに居てくれ…手配の工作員の親玉はあのビルに居る」

「はい、おとーさん」

R Rは駅付近で買い物をしているH G達と合流した。R RはH Gに事情を話して、

R R「H G、手を貸してくれ」

H G「いいぜ、どのくらい人数が要る？」

R R「…そうだな、多ければ多い程がいいが…」

H G「皆、R Rから話を聞いたな！F県領地の事件の後始末になったが、決着をつけるぞ」

「「ハイ！」」

と返事をした一行。

H G「…さてと、K MとS KとS Mはここから先に駅に行ってくれ」

K M「分った」

S K 「おう」

S M 「はい、社長」

H G 「あとは…T TとY Mも帰る」

T T 「そんなー」

Y M 「先輩、酷いです」

H G 「…それから、T KさんとM Zさんも帰って下さい」

T K 「あら…なぜでしょう？（折角、またH G社長とドンパチ出来るのに！）」

M Z 「どうしてでしょう？（A M様にいい所見せたいですわ）」

H G 「特にM Zさんは、これからのドンパチに参加したら、国際問題でしょ！」

M Z 「…ですが…今回は、私一個人での参加ですから、ダメですか？」

T K 「だったら、私も」

R R 「加勢は多い程いい…確かにM Zさんは、問題がありそうだが、この際目をつぶろう…」

H G 「うーん、ではお願いします」

「はい…！」

H G 「E Y、N A、K Tは、手を貸して欲しい」

「「はい師匠」」

T T 「でしたら、私も」

Y M 「先輩いゝ私も」

H G 「Y M、お前さん “特別銃器携帯・使用許可証” は？…ここに残って居るのは、お前さんを除いて皆持つてるんだぞ」

Y M 「あら…持っていますよ」

H G 「ナニ？」

Y M 「以前、T Tから聞いて、私も取りました。拳銃と小銃と突撃銃と散弾銃ですけど…」

と言って、Y MはH Gに「特別銃器携帯・使用許可証」を見せた。

H G「わかった！でも、防弾インナー着用な」

M Z「だったら、安くしときますよー」

と言って、M Zは持っていたトランクから新品の防弾インナーを取り出す。

H G「商売気味いな…じゃ、防弾インナー持ってない人！」

R R、R L、T K、Y M、N A、K T「ハイ」

E Y「忘れましたー」

R L「あと、娘のSのも…」

H Gは、H Y達に向かって

「おい、誰か予備貸せる人？」

H Y、I Y、T Y、I A、M P、A M、I I「はい」

H Gはそれを見て

H G「A Mは、R Rに貸してやれ、I YはE Y、T YはN A、I AはK T、H YはR S…おい、M Zさん。新品は何着あるんだ？」

M Z「ハイ、女性用三着在りますわ」

H G「じゃ、勘定合うな…えーい、金に糸目は付けねえーその3着…俺が払う！」

R R「いや、俺が出すよ」

M Z「毎度アリー」

H G「R Lさん、Y M、T Kさんは、M Zさんから新品を受け取ってください」

M Z「ハイ、ちゃんとありますわよ」

と、M Zから防弾インナーを受け取ると、

R L「このインナーって、どのくらい防弾力あるの？」

と、防弾インナーを広げていった。それに対して、

TK「はい、私以前この防弾インナーをHG社長から借りた時に、五メートル程の至近距離から拳銃で背中を撃たれた事がありまして、ショックで気絶してしまいました。弾はストッパしましたわ」

と、TKが言うと、RL達は驚いた。

RL「まあ…」

YM「そんなに！」

RL、YM「でも、どんなシチュエーション？」

TK「はい、HG社長と、Y国際港のマフィアの抗争に巻き込まれて…その、撃ち合いになりました。その時に…」〔巻き込まれ親父の邂逅〕参照

と言うと、

TT「…（あの時のドンパチの事ね…）」

と、TTは忌々し気な顔をした。RLは、

RL「まあ（ああ…あの時、ウチの人が絡んでいる時ね）」

と苦笑して、YMはただ驚き、

YM「そんな事が…」

RR「あと、武器が欲しいな…皆拳銃だと、心細い…」

とRRが、自分の拳銃を取り出して、HGに言うと、

HG「うーん、また借りるか…」

RR「またって…当てがあるのか？」

HG「あそこの海軍さんから…」

と言って、HGは対岸のO県領地の正規海軍基地を指さした。

RR「なんだとー、それって大事になるのでは？」

H G「あそこの情報部長のA T中佐は、F県領地のC国反政府組織の工作員撲滅に熱心な方だから、多分そんなに大事にしないで貸してくれると思う。本当は、Y Mに頼って、民兵会社時代の伝手で、前に居た会社の支部から借りる手があると言えはるのだが…こっちの方が後で悶着があるので、できれば避けたい」

と、H Gは困った表情をした。それを見たR Rは、H Gが元居た会社から武器を借りるのを嫌がっているのを感じ、

R R「そうなら、いいのだが」

H GはO県領地の正規海軍基地の情報部情報課のO J少尉と、海兵隊大隊長S R大尉に個人的にメールをした。O J少尉には、F県領地のC国反政府組織の工作員のボスを発見して、これからアジトを襲撃するために、A T中佐に対して話を通してほしい旨と、S R大尉には、O Jにした話に、更に武器の借用について…

十数分後、H Gのスマートフォンの着信音が鳴る。見た事の無い番号で…

「はい」

『H G君の電話でよろしいかな?』

「あつ、はいA T中佐。ご無沙汰しております」

なんと、通話の相手は情報部のA T中佐本人からであった。

『O J少尉から聞いたのだが、C国反政府組織の工作員の大物の居所を見つけたそうだね』

「はい、そうです」

『どうやって見つけたのかね?』

と、A T中佐から聞かれて、思わず口ごもるH G…それを見たR RがH Gにスマートフォンを貸す様に合図して、それを受け取ると、

「初めまして、私はH Gの友人R Rと申します。私は先のC国皇帝陛下配下のシンジケート

“R 交易商公社”の社長をしております。かのC国反政府組織の工作員のボスは、本国から手配書が私の元に来ておりまして、たまたまHG達と旅行をしている時に、見つけました。不審に思われたのなら、私の事をO県領地知事OT殿下に照会してください結構です。OT殿下の奥方様は、C国皇帝陛下の御息女であられまして、臣下のRR：私の事をご存じます”

と、RRが自分の身分を明かすと。AT中佐は

『わかりました：HG君のご友人と言うのなら、信じましょう：OJ少尉から聞きました
が、何を協力すればよろしいかな？』

「いきなりの話を信じてくださいます、誠にありがとうございます。これから連中のアジ
トに襲撃を仕掛けるつもりです：ですので、銃器と弾薬をお貸し願えれば有難いのです
が…あと、”発砲許可申請（銃器発砲許可申請書）”も…」

『成程、そう言う事ですね。分かりました、また私の一存と言う事で、援助しましょう。こ
れから、OJ少尉とSR大尉を船で向かわせます。貸し出す武器については、SR大尉と話
をしてください。OJ少尉はこちらの連絡要員として、同行させていただきます』

「そんな：勿体ない：ありがとうございます」

『では、健闘を祈ります』

と言って、RRはAT中佐との通話を切り、スマートフォンをHGに返すと、今度はSR大
尉から着信があった

「はいHGです」

『おう、HG久しぶりだなー。こっちに来ているんだったら、連絡くらいくれれば、F県領
地の屋台で奢るのによ：ま、AT中佐から援助の命令を受けた。貸し出す銃器はこれだけで
いいのか？携帯ロケットランチャーとか迫撃砲はいらんのか？』

「：そこまでは、いいです（苦笑）」

『人手は？ウチの部下出そうか？』

「それをやったら、問題になるのでは？」

『それでもないぜ、C国反政府組織の工作員撲滅は正規軍の至上命令だからな…特にAT中佐は熱心だし』

それを聞いて、HGはRRに

「どーする？海兵隊さんは、兵隊貸してくれると言っているが…いきなりO県領地の海軍基地から海兵隊がここに上陸したら…」
と訊ねると、

「F県領地駐留の正規陸軍に心象が…」

と、YMが横から口を挟んだ。HGはYMの言葉に頷くと、RRに顔を向けた。RRは黙って首を横に振った。それを見てHGは、

「申し出は、ありがたいです。ですが、現在の戦力で十分と判断しております」

『…分かった。でも、俺は参加するぜ！』

と、SR大尉が言ったので、HGはギョツとしたが、仕方なく

「ご加勢、痛み入ります」

と言って、通話を切った。

…やがて、対岸のO県領地の海軍基地から、一隻の高速連絡艇がF県領地の国際港に接岸した。出迎えるHGに、OJ少尉とSR大尉が手を振って答えた。

「ガハハハッ、HGまたお前と作戦できて嬉しいぜ」

と言って、HGと握手するSR大尉に、EYが近寄ってきて、

「あの一、SR大尉ですか？」

「…そうだが？」

「自分は、皇国正規海軍Y海軍基地所属、海兵隊第3海兵団所属、第一大隊第三中隊第一小队 第二分隊分隊長EY伍長です」

と、海軍式敬礼をすると、SR大尉は答礼して

「…Y海軍基地の海兵隊第三海兵団…って、EMの部下か、お前！」

「はい、EM大尉からお噂はかねがね…」

「あいつ（EMはSRの別れた元妻です）は元気かね…って、いうより、なんで海兵隊員がHGの一行に居るんだ？」

「はい、自分はHG師匠に弟子入りを志願している者です。ここには、一個人の弟子入り志願者として同行を許されています」

「そーか、HGが前の民兵会社時代の部下達とエージェント派遣の会社も始めた事は、OJ少尉から聞いていたが…そう言えば、EMからそいつらと模擬戦したって聞いたな…」

「はい、その模擬戦で師匠の弟子達に完敗しましたので、弟子入りを志願しました」

「そうかい！海兵隊員が居るのなら、持って来た武器の扱いは大丈夫だな」

「ハイ！」

「じゃ、降ろすの手伝ってくれ！」

「ハイ、ゴメン皆手伝って」

「『はい』」

EY達が作業を始める横で、

「やあ、OJ少尉」

「やあ、HG…また、弟子達が増えたね」

「いや…あれから、弟子は三名（IA、MP、AM）増えただけだよ…一人の社員（II）を除いて、他の人は、旅行に同行して来た人達…」

「えっ？オイオイ、じゃこの人達は？」

「大丈夫…ここに居る皆、所属する組織はそれぞれ違うが、全員『特別銃器携帯・使用許可証』持ち…中には『殺人許可証』持ちもいる…(汗)」

「なんだと！」

OJは驚いた。HGの一行で帰った人(SKとKMとSM)を除いて、残った人達は、HGとIIとAMとRRを除いた他は全員女性…中には外国人(MPとMZ)も居る。

「安心してくれ、皆腕前は私が保証する」

「そうか…」

と言って、OJは安堵した。

●C国反政府組織工作員組織掃討作戦

港で装備を整えたHG達。その中の女性でスカートを履いている人は、高速艇の中で、自分のスラックスとかパンツスーツとか動きやすい服装に着替え、ない人はSRから借りた戦闘服の下を履き、RRが呼び寄せた地元の金龍公舎の現地要員五人を加え、波止場で円陣を組み、HGが開口一番、

「さて、RR」

「なんだ？」

「作戦の指揮権は、どーする？」

「どうする…って言ったって、本来俺が指揮を執るところだが、お前の息子と娘達以外は俺の言う事を聞かないだろう…だから、HGお前が指揮を取ってくれ」

「わかった！」

「では、指揮権は俺が執る事にする」

「いいぜ！お前の指揮で作戦してみたかったんだ」

とS R大尉が言った。

「R R」

「おう」

「建物の見取り図とかあるのか？」

「これに…」

と言って、R Rがスマートフォンに建物の見取り図を表示した。

「ビルは五階建てか…地図は？」

「それも、ここに」

H Gは地図を見ながら、

「H Y、I Y、N A」

「二「ハイ」」

「お前達は、スナイパーライフルでここと、こここのビルに上がってくれ、あと、擲弾筒も」

「二「ハイ」」

「A M」

「はい」

「お前は、M PとM Zさんを連れて、ビルの裏口に待機。撃ち漏らすなよ」

「はい」

「散弾銃と突撃銃と軽機関銃と、短機関銃を持っけ…あと催涙弾と閃光弾も…」

「はい」「ハイネ」「ハイ」

「T Y」

「はい」

「お前は、I AとT TとY Mを連れて、この通りにつけ。突撃銃と短機関銃を持って、全面の突入班がビルに入ったら、ビル入り口を封鎖して、蟻の這い出す隙も作るな」

「はい」

「I I」

「はい」

「お前は、R SとR Lさんを連れて、この通りにつけ。突撃銃と軽機関銃と擲弾筒を持って行け、全面の突入班がビルに入ったら、裏口とビル側面に注意を払え」

「はい」

「R R」

「おう」

「お前は、俺と残りの人達と、正面から突入する。S R大尉、お願いします」

「いいぜ、H G」

「正面は、二班に分ける。攻め手と支援とに…攻め手は、俺とR Rとその部下達それとS R大尉。支援はT Kさんと、E YとK T…」

「ちょっと、待ちなH G」

「なんだR R」

「指揮官が突入部隊の先方とはお門違いだぞ。だいいち、H Y達スナイパー隊に誰が指示するんだ？」

「俺もそう思う」

と、S R大尉も言った。

「だったら、どうする？」

「俺達（金龍公舎の現地職員）とS R大尉が突入する」

「だったら、俺はE Y伍長を連れて行く事を進言する」

S R大尉が言うと、R Rは頷き、

「それでいいでしょう」

と、R Rが言うと、H Gは

「うっ…うむ。分かったそうしよう。では各自配置に着け！」

「[[ハイ]]」

●C国反政府組織工作員組織掃討開始！

H G達の着けているインカムに各配置場所から連絡が入る。

『こちら、A M。配置に付きました』

『こちら、T Y。配置に付きました』

『こちら、I I。配置に付きました』

『こちら、H Y。N Aと配置に付きました』

それを聞いてH Gは（H YはN Aの観測手についたか…）と思った。

『こちら、I Y。配置に付きました』

「H Y、N AとI Yの指揮を頼む。それから建物周囲で何かあったら教えろ」

『わかりました』

と報告が入った。側面隊のI IとT Yそれぞれの隊が、通行人の整理をしたのを見計らって、

「では、行きますかね」

とH Gが言うと、正面突入隊は

「[[応]]」

と答えた。

H Gが擲弾筒に催涙弾を装填して構えると、正面隊の攻め手は雑居ビルの入り口に移動する。

H Gが雑居ビルの一階と二階に催涙弾を打ち込むと同時に、正面隊の攻め手は、まず一階を制圧にかかる。同時に裏口に居るA M達が身構えた。

『正面隊一階突入！』

と、言う報告を受けて、H Gは

「A M、正面隊が突入した。突入！」

『はい』

A M隊は裏口の鍵を散弾銃で破壊し、突入する。

「I IとT Yは、通行人保護の要員各一名を残して、配置を移動しろ！」

『『ハイ』』

『一階制圧！続いて、上に上がる』

『裏口隊、非常階段を上がる』

『二階、三階クリア』

正面隊は、通用階段を登り、裏口隊は非常階段を登っていく。その間、窓から出ようとする者に対して、I YとN Aが狙撃をする。また、窓から逃げた者達は、I IとT Yの隊が捕縛した。

「H Y、最上階に催涙弾を撃ち込め！」

『はい』

H Yが擲弾筒に催涙弾装填して雑居ビルの五階に打ち込む。四階と三階の通常階段を挟んでR RとS R大尉達との攻防戦が繰り広げられていた。

四階からの抵抗は凄く、路上に居るH G達に対して、銃撃を浴びてきた。

「H Y、四階に催涙弾を撃ち込め！」

『はい』

と指示をすると、H Gも自ら擲弾筒に催涙弾を装填して四階に向けて打ち込む。同時にH Yも擲弾筒に催涙弾装填して雑居ビルの四階に打ち込む。

この時、F県領地の県領地警の車両が到着した。

「O J少尉、お願いします」

とH Gが言うと、O Jは頷き、県領地警に対して説明のために赴いた。

「…さて、早く決着付けないといかんぞ！交通整理は県領地警に任せて、俺らも突入しよう！」

「は、う」

H Gは擲弾筒を突撃銃に持ち替えて、正面入り口に突入した。

H Gが三階の踊り場に到着すると、四階のC国反政府組織の工作員と撃ち合いになっていた。

「状況は？」

「下から押し上げたのが、溜まって人数が多い。倒しても、倒してもまだ居やがる」

とR Rの言葉に、H GはK Tから軽機関銃を受け取ると、

「これを使え…俺は裏口隊に加勢して来る」

「頼む」

H Gは三階に降りて、フロアのC国反政府組織の工作員達を捕縛しているR LとT Tに

「状況は？」

「はい、ここに居る人達は、捕縛しました」

とT Tが言った途端、ロッカーに隠れていたC国反政府組織の工作員が飛び出してきて、H

Gに拳銃の狙いを定めたが、側にいたR Lがそれに気づいて、C国反政府組織の工作員の拳銃を手刀で払い落とし、素早いハイキックでC国反政府組織の工作員の側頭部に当て倒れた所を素早くねじ伏せた。T TとT KとK Tはそれぞれ拳銃を構えていた。それを見てH Gが感心して

H G 「Lさんやりますね」

R L 「あら…これでもわたし、R Rと結婚する前はC国政府の現与党の元秘書官兼ボディガードでしたのよ」

H G 「成程ね…R Rが妻にするわけだ」

T K (R R社長御一家は、C国の皇帝配下の商社関連の方だと思っていたら、C国政府機関の関係者でもいらしたのね…私もあれくらいできれば、H G社長のパートナーになれるかしら…)

H G 「T Kさん」

T K 「はいH G社長」

H G 「R R一家の事は、内緒に願いますか？特にI Sに対して」

T K 「はい、わかりましたわ(H G社長と共通の秘密持ったわ…お身内と認めて下さったのですね(オイオイ。作者))」

やがて、O県領地海軍基地から、高速連絡艇で渡ってきた海兵隊一個分隊が、H G達が戦闘をしている雑居ビルに来た。

路地に居るI IからH Gのインカムにその事が報じられ、窓からH Gが見ると、その分隊の中にA T中佐と皇族でO県領地知事のO T殿下の姿を認めた。O T殿下は、帝都に来た時に碇屋に警護を依頼するため、H Gは見知っているので、H Gは、(うわー、O T殿下まで…なんで?)と、事態が大事になっていくのを、見て頭を抱えそうになったが、その一行

はH G達に加勢するのではなく、県領地警の車両に向かって行った。

「？」

すると、県領地警は規制線を広げ始め、マスコミを遠ざけた。そして、一部の警官はビルに入り、H G達が捕縛したC国反政府組織の工作員を道に引っ張り出し始めた。

H GとR Rはそのまま警察に、鳶に油揚げを攫われるようにして、連れて行かれるのを危惧したが、警官達はC国反政府組織の工作員を道に並べて武装解除をしているだけで、連れて行く気配はなかった。

H Gは三階の非常口を開けた。そこでM Pと鉢合せになった。

「アッ、シャチョー」

と言って、M PはH Gに向けた拳銃を下げた。

「応、M P。状況は？」

「ハイネ、A MとM Zは五階に行ったネ。上から下に攻める予定…ワタシはそれを伝えるに来たネ」

「そうか、俺も同じことを考えていた。では行こうか」

「ハイネ」

「K T」

「はい」

「今の話、R Rに伝えてくれ、その後君は我々に合流するように」

「はい」

「では、T Kさん行きましょうか」

「はい（キヤー嬉しい…これからドンパチが出来るのですね）」

と返事をして喜んだ。（バトルジャンキー…（汗）作者）

この時、H Gが自分のバディにT KとK Tを連れているのは、K Tがそもそも、他の面子と違い、K Tの職場は港町警察署の総務部の事務職で戦闘経験が全くなく、そもそも、彼女が「特別銃器携帯・使用許可証」を受験した動機が、いつも受付で施設借用の届出書を書いているH Y達の「特別銃器携帯・使用許可証」に興味を持ち、自分も取得できると思ったため。T Kは、過去のH Gとのコンビでドンパチやった経験（「巻き込まれ親父の邂逅」参照）から、H Gがバディとして選んだのと、B侯爵に配慮：ならびにT Kがバトルジャンキーなため、他の人と組ませられないからである。

H G達は非常階段を使って、最上階の五階に到達し、A M達と合流するが、H Gはその更に上を気にしていた。やがて

「M P、M Z」

「ハイネ」「ハイ」

「二人は、四階の非常口を見張れ。そこから逃げ出そうとする相手を制圧」

「ハイネ」「ハイ」

「A M、K T」

「はい」

「二人はここで待機。ここ（五階非常口）から逃げ出そうとする相手を制圧」

「はい」

「T Kさん」

「上（屋上）に登る。ついてきて」

「はい（よいよ、私の腕前をアピールする番ね）」

H Gは、五階の非常階段の踊り場にある屋上への梯子に手をかけた。

H Gが梯子の最上段に手をかけ、鏡を使って屋上を見るとそこには三人の人物が見えた。

「誰か居ますか？」

T Kの問いに、H Gは

「居る…多分R Rの言っているC 国反政府組織の工作員の親玉だと思う…それを知っているR Rか、その家族に確認させないと分からないが…」

と言って、H Gはスマートフォンを操作して、鏡越しに屋上の人物を撮影すると、R R達に写真を送信した。

すぐさま、R Rから返信が来る。『そいつの一人が親玉。行くまで待ってろ！』と、

H GはH YとI Yに「屋上の人物に注意しろ！そいつらがトップだそうだ」と連絡した。

『了解です』

「誰か、狙えんか？」

『I Yです。ここからは人影は見えますが、狙えません』

『H Yです。給水塔の陰に隠れて難しいです』

やがて息を切らしてR RとR SがH G達の居る5階非常口に来た。

「…ハアハアハア…H G…奴は？」

「まだ上に居る。H Y達に見張らせている」

「狙撃できないか？」

「H Y達からの報告では、給水塔の陰に隠れて無理だそうだ」

「…そうか、ならこちらから乗り込むか」

「そうだな」

と言って、H Gは擲弾筒に催涙弾をセットするが、R Rが

「待て、ここから屋上に催涙弾を撃っても効果が無いぞ」

「…そうだった…」

「スモーク弾は？」

「あるぞ…でも、屋外だと擲弾筒一丁だけでは」

「いや、注意を引ければいい。誰か散弾銃持っていないか？」

「ハイネ」

M Pが普段は必殺技用にロングスカートの内側に隠して持ち歩いている散弾銃をこの時は背負っていた…それを取り出し。R Rに掲げて見せた。

「弾は何が入ってる？」

「対デモ鎮圧用の強化ゴム散弾ネ」

「貸してくれ。H G場所代わってくれ」

「応」

H Gが屋上に登る梯子を降り、代わりにR RがM Pの散弾銃を持って梯子を登る。H Gから渡された鏡で屋上の様子と風向きを観察するR R…風はおあつらえ向きに追い風…

「H G、俺が合図したら、スモーク弾を屋上に撃ってくれ…間違ってもビルを飛び越すなよ」

「うるせー」

「撃ったら、俺に続いてくれ」

「応。T Kさん、私の後に続いて梯子の上段から頭を出したら、援護射撃をして下さい」

「はい（さあ、ドンパチするわよー）」

「じゃ、H G撃て」

「応」

H Gが擲弾筒からスモーク弾を発射する。狭い屋上に撃ちあげるの、その弾道は殆ど垂直…H Gが撃ってから長い時間がかかって、屋上に何か金属物がぶつかる音がした。

その音を合図に、R Rが屋上に散弾銃だけ出してあてずっぽうで一発牽制射撃をする、

屋上に這い上がる。H Gがそれに続く。T Kが続いて梯子を登ると銃声が聞こえた。T Kが屋上の様子を視界に収めると、そこには給水塔の傍で腕を抑えているC国反政府組織の工作員らしき人物と、それを庇うようにして、H GとR Rに拳銃を撃つ同じく二人のC国反政府組織の工作員らしき人物：T Kは慌てて拳銃の狙いをH G達に拳銃を撃っているC国反政府組織の工作員の一人に向けて、引き金を引いた。その時、同時に複数の発射音が屋上に響いた。

T Kは次発の狙いを定めようとたが、屋上にH Gが撃ったスモーク弾の発する煙が流れて相手が見えなかった：

やがて、煙の隙間から屋上の床に伏して居る三人の人物と、それを散弾銃で制している人物と、伏して居る人物を捕縛している人物が見えた。

T Kが屋上に上がり、途中にあるまだ煙を出し続けているスモーク弾を屋上の端に向かって蹴ると、拳銃を構えながら、人物達の居る場所に近寄った。

そこには、無事C国反政府組織の工作員を捕縛したH GとR Rが居た。

「やりましたわね！H G社長」

と言って、T Kが喜んでいると、H GとR Rは渋い顔をして、

「どーやって、下に降ろそうか…」

と言った。

最初の銃声は、H Gの撃ったスモーク弾に反応して拳銃を構えたC国反政府組織の工作員の一人がR Rの撃った散弾銃に驚いて、給水塔の陰から出てきたところを、N Aの狙撃で拳銃を撃ち落したモノだった。後の銃声は残りの二人とR RとH G、T Kの援護射撃の銃声で、T Kの援護射撃は、C国反政府組織の工作員の拳銃を撃っていた一人の足に当たってい

た。RRとHGは対テロリスト用の強化ゴム弾であり、RRはC国反政府組織の工作員の拳銃を撃っていた一方の腹部に当たり、行動不能にして、HGの撃った弾は別のC国反政府組織の工作員の拳銃を撃ち落していた。

…TKの拳銃は、HG達の使用する拳銃より小口径なので、対テロリスト用の銃弾が用意できなくて、実弾です。作者

結局、屋上のC国反政府組織の工作員は、手配のボスとその腹心と部下…RRの金龍公舎の現地要員達により、担ぎ下ろされた。

●なんか大事に…

C国反政府組織の工作員のアジトの雑居ビルの制圧が終わり、雑居ビルの入り口に集まったHG達…死者は出なかったが、RRの部下に足に被弾した者と、腕に被弾した者が各一名、ビル内で転倒する、捕縛時に暴れられて打撲を追う者等の軽症者数名…

捕縛したC国反政府組織の工作員達は、道路上に並べられて警察官が監視していた。

そこにAT中佐がOJ少尉と共にやってきて、

「HG君、RR君、OT殿下が君達にお話があるとの事です」

「はい」「はっ」

RRとHGはB侯爵家令嬢のIY、OT殿下が帝都に來た時の警護担当のTYとAMを連れて、OT殿下の元に参じた。OT殿下の前に片膝をつくHG達。

「HG殿。この度はC国反政府組織の工作員掃討ご苦勞様です」

「は、ありがたきお言葉」

「配下のIY令嬢ならびにTY、AM共にご苦勞様です」

「ありがたきお言葉、痛み入ります」

とI Yが代表して答えた。

：I Yは家を出された身ですが、姪の降嫁先のB侯爵の娘なので、爵位に準じた扱いをされていきます。作者

「私がここに来たのは、臣A Tより、この地でH G殿達が旅行に来ていて、偶然にもC国反政府組織の工作員のアジトを突き止め、それを捕縛するとの話を聞き、H G殿と配下の働きをこの目で見たいと思うのと共に、我が妻より依頼があり、C国皇帝陛下臣下のR R殿の存在を隠すために、F県領地知事ならびに、F県領地警察と正規陸軍を抑えるため足を運びました：R R殿、C国反政府組織の工作員掃討、ご苦勞様です」

「勿体なきお言葉、痛み入ります。また私に対するご配慮、ありがたき幸せ」

と言つて、R Rは頭を垂れた。

「そこで私から提案があるのですが」

「はい」

「R R殿が、所望するC国反政府組織の工作員は引き渡しますので、それ以外の工作員は地元県領地警の手に渡して構わないでしょうか？」

「はっ：それは誠にありがたき事：私は工作員の親玉とその腹心の2名だけを引き渡していただければ…」

「それでは、取引は成立しましたね。では、私からF県領地知事に対し、話を通しましょう」

「はい、勿体なきご配慮。感謝の極みです」

と言つて、R Rは頭を垂れた。O T殿下はH Gに向かって、

「では、また。帝都に行った折には、警護を頼みますぞH G殿」

「はは」

「あと、I Y令嬢」

「はい」

「B 侯爵によりしく伝えてください。H G 殿と I Y 令嬢達の仕事ぶり、この O T しかと拝見しましたと…」

「ハハッ！」

O T 殿下が、その場で F 県領地知事に電話連絡をしたのち、A T 中佐と共に高速連絡艇に乗り込むのを見送ると、R R は

「S」

「はい、おとーさん」

「お前の所（C 国家保安局）に連絡して、連中を引き渡せ」

「はい」

国際港の高速連絡艇で着替えた人達を前にして、

「…さてと、今からなら、まだ帰りの夜行列車に間に合うな」

と、H G が時計を見ながらつぶやくと

「E Y、N A、K T と M Z さんと T K さん」

「「はい」」

今から駅に向かえば帝都行き of 夜行列車に間に合いますので、すぐに駅に向かって下さい。駅には K M 達が居るはずなので、切符を貰って下さい」

「「はい」」

と、T K を除いて返事をした。

「T T、I I」

「「はい」」

「お前さん達も、帝都に帰れ」

「はい…でも准尉達は？」

「あれだけ、暴れたんだ…後片付けしてかないと…」

「そうですね…じゃ私も…」

とIIが言うと、

「いや、二人供帰って白山亭の営業！」

「はい」

「YM」

「はい、先輩」

「最後、大変な事に付き合わせて悪かったな。お前さんも帰って」

「はい、先輩…また」

「ああ、またね」

TKはまだその場に残って、モジモジしていた。HGは

「TKさん」

「はい」

「大変な目に遭わせてしまい、申し訳ありません」

と言って、HGが頭を下げると、TKは慌てて、

「いえいえ…そんな…頭をお上げください」

「暴れ足りませんでしたか？」

とHGがニヤリとして言うと、TKは途端に顔を赤らめ、（ドキッ！私の本音がバレていましたわ…ヤダー、恥ずかしいですわ…）と思って、両頬に手を当てて横を向いた。

「私は、あなたの銃が我々の三十八口径と違い、三十二口径であるため、対テロ用のゴム弾が用意できなかったばかりか、殺人許可証を持っていたとしても、私はあなたに人殺しをして欲し

くなかった…いや、人を撃って欲しくなかったのです」

と、H Gが言うと、T Kは（ウツ…もつとドンパチしたかったのに…H G社長は私を大切に思ってた下さっていたのですね…嬉しい―）と、T Kは勘違いして嬉しそうにH Gを見つめた。

…オイオイ！あんたがバトルジャンキーモードで暴れたら收拾が尽きなくなるからだよ。作者

「ですので、皆さんと先に帝都に帰って下さい」

とH Gが言うと、T Kは

「あつ、あのですね…」

と、まだ未練がましく言うので、H Gは

「何ですか？」

と訊ねると、

「今回の旅行は、私はYお嬢様のお目付け役として…ですね…ゴニョゴニョ…」

と、口籠ってしまった。H Gは（この旅行に来るために、B侯爵に嘘をついてまで…）と考え、

「…ああ、成程！そういう事にしておきますよ。安心して下さい」

「はい、ありがとうございます。では、先に帰りますわ…また白山亭にお伺いしますね」

と言って、T Kは先に駅に向かった人達を小走りで追いかけた。

その横で、R Rは妻のR Lに

「L」

「はい、あんた」

「俺はSと後始末に残るから、T T達と先に帰ってな」

「はい、あんた…土産だけ持ってくわね」

「たのむ」

帰る組と残る組とここで別れた。

「じゃ、海軍さんから借りた装備を返すから、損傷などの確認をしたら、連絡艇に持って行くう」

「「はい」」

H G達は、S R大尉と共に借用装備のチェックと破損等のチェック、使用弾数のチェックを行った。

「H GとR Rさんよ、これが終わったら、皆でF県領地の飲み屋に行こうぜ、奢るよ…」

「ありがとう…ご相伴にあずかるう、S R大尉」

F県領地の飲み屋で、打ち上げをしている時に、

「准尉」

「なんだ、A M？」

「実は准尉にお礼を言いたくて…」

「なんだ、改まって」

「二つあります。一は、毎朝の訓練でT Y先輩とI Aが剣術の練習をしているのを見て、准尉からの勧めで、自分もT Y先輩から棒を習い始めた事です」

「ん？」

「あの時の練習が、今回の襲撃で役に立ちました。任務では銃器を使うので、最初、棒とか剣とかは、必要が無いと考え、単に射撃時の集中力の鍛錬にしか使えないと考えていましたが、准尉が『やってみると、何かつかめるかもしれんぞ』と言う言葉で始めました」

「ほう？」

「今日、一階の裏口から突入した時、相手に大鉦みたいな武器で襲われて、無意識に持っていた散弾銃の銃床で避けることが出来ました。棒の練習をしていなければ、できなかったかもしれません」

「おう、そうか」

とH Gが言うと、T Yが

「わたし達の練習も、まんざらでもないでしょ？わたしは、体術や組手では、H Y先輩やI Yに敵わないから、剣術で鍛えてるのよ。I Aも得物を持てば、相手に対抗できると思って、鍛えてるのよ」

「ハイな姐さん」

「ごもつとも…」

そこに、H Yが

「やっていて、良かったわねえ」

と半分からかう様に言った。

「姐さん、何でも馬鹿にしないで、やってみることが大事だと再度認識しました」

「再度？」

「はい、自分が民兵会社辞めてフラフラしていた時、准尉が『何事も基本が大事』と言う言葉で、再度勉強し直して、色々経験して今ここに自分が准尉から認められるようになりましたから（「巻き込まれ親父の厄災」参照）」

「あら、A M言う様になったわねえ」

H Yの言葉に、A Mは赤面しながら、

「それから、もう一つ。今回の旅行で准尉と姐さんとI Yが、准尉について行こうとした考えた気持ち分かる様になりました。今日の襲撃で准尉が見せた事について、自分も姐さん達に負けずにもっと教えて貰いたいと思いました」

「それは、皆同じ考えよ」

「そうぞ、A M。わたしもつと准尉から学ばないと」

「ハイな姐さん。あたしもです」

「わ、私も負けませんよ。A M先輩」

「ワタシもネ」

と、娘達が口々に言うのと、

「ガハハハッ、おいH G！いい弟子達だな」

とS R大尉が、H Gに酌をしながら言った。

「本当に、ありがたい息子娘達です」

と言って、H Gは笑った。

●温泉リベンジ

O T殿下の計らいにより、翌朝早朝F県領地空港発帝都行き飛行機に乗り、白山亭に帰ってきたH Gとその息子・娘達。R RとR SはC国反政府組織の工作員の親玉を受け取りに来るC国国家調査局の要員の乗った飛行機がH G達の乗った飛行機と入れ違いにF県領地の空港に来るので、現地に留まった。

母屋の各自の部屋に着くと、荷物を放り出し、その場に倒れ込む。

「なんか、最後ハードだったわねI A…」

「はいな姐さん」

T YとI A二人とも、畳に仰向けで会話する。

「…疲れた」

と、そこに開けっ放しにしている周り廊下側の襖の間を、タオルを持ったM Pが歩いて行く。

それをTYが見つけて

「MPどこ行くの？」

「向こう（F県領地）で折角、温泉浸かってリフレッシュしたのに、最後大暴れネ。汗流しにIYの言ってた近所の銭湯イクネ」

「…二十四時間入れる風呂がここ（母屋）にあるのに？」

「ハイネ、温泉リベンジ…ナンチャッテ！」

「あら、いいわね！それ、わたしも乗った！MPチョット待ってよ。HY姉さん達も誘って行こうよ」

「ハイネ」

とMPはニツコリ笑って返事をした。TYはHY達の居る部屋の襖を開けて、

「HY姉さん、IY。MPがこれから銭湯に行くって言うんだけど、一緒に行きませんか？」

「母屋に風呂があるのにですか？」

と、畳と同化しているIYがダルそうに訊ねた。

「わたしと同じこと言わない！折角F県領地で温泉浸かってリフレッシュしたのに、最後でハードな事やったので、再度銭湯の温泉でその汗を流すのよ」

「…それ、ワタシが言った事ネ…温泉リベンジ！」

「…そうでした」

「いいわね！わたし行く！IYも付き合いなさい」

「はい姉さん」

HY達が銭湯に着いて、脱衣所から風呂場に入ると、そこにはEYとNAとKTが既に入浴していた。

「あら…あなた達、帰ったんじゃないの？」

「はい、わたし達は官舎の風呂に入れる時間は、まだ先なので…」

とNAが言うと、KTも頷く。EYは

「自分も、兵舎の入浴時間にまだ時間があるので…それにIYがここの銭湯の事話していたので、二人を誘って入りに来ました」

「皆、考えている事同じね」

「『『そうですね』』」

「そう言えば、HYさん達、お早いお帰りですね。私達が乗った夜行列車には間に合わなかったハズですが？」

とNAが言うと、

「ええ…片付けの後、SR大尉とOJ少尉にF県領地名物の屋台村に連れて行って貰って飲み明かして、AT中佐のお計らいで、朝一の飛行機に乗せて貰ったの」

…本当はOT殿下ですが…それを知っている者は、HG達一部です。作者

「そうなんですね」

そこに、更なる人影が…

「あら、皆さんお揃いで…」

「『TTさん！』」

TTは皆を見て、

「皆、考える事は一緒ね」

と言うと、一同笑顔になった。

「…それにして、F県領地の事件の後といい、今回の事といい…F県領地では走り回って汗臭くなってこっちに来る…何かの因縁かしら…ブクブク…」

と、湯船に沈み込みながらHYが言うと、

「そうですね。姉さん」

とI Yが相槌を打つ、

「今回は、酒臭くないわねI Y！（「巻き込まれ親父の鎮魂」参照）」

「姉さん、やめてください！」

「「アハハ！」」

E Yは銭湯を出て、皆と別れて一人白山亭のあるY国際港駅からN AとK Tの帰る警察官舎と反対方向の電車に乗り、隣駅のY海軍基地駅に降り立った。

Y海軍基地の海兵団兵舎に荷物を置くと、その足で海兵隊大隊執務室に向かった。

「E Y伍長入ります」

「お帰りなさい、E Y伍長。旅行はどうだった？」

と言う、上官のE M大尉に、

「はい、旅行は楽しく、また色々学ぶことができ、F県領地の事件の真相と碇屋の創業のきつかけとなった話も伺う事が出来ました…それから最終日に事件に巻き込まれ、向こうでH G社長指揮の元で作戦に参加しました」

とE Yが言うと、E M大尉は、困惑して、

「…なにそれ？報告して」

「はい、H G社長のお連れの方が、F県領地の市街地でC国反政府組織の工作員の親玉と言う人物を発見して、潜伏するアジトを突き止め、O県領県知事O T殿下の御承認の元、O県領地海軍基地情報部のA T中佐の依頼でH G社長がC国反政府組織の工作員掃討作戦の指揮を執る事になりました。自分はその掃討戦に参加しました」

と、E Yが言ったが、E Yの内心は複雑なモノだった…それは、駅に向かう前にA T中佐に一同呼び止められ「今回の掃討作戦は、O T殿下御承認の元に、私がH G君に依頼した事にしてください。R R君達の事は秘密にするように」と釘を刺されていたのである。

「あと…その作戦の際に、〇県領地海軍所属の海兵隊大隊長のSR大尉にお会いする事ができました」

「まあ…」

「SR大尉はAT中佐の命令の元、HG社長達に武器弾薬の提供を行い、また自ら作戦に参加されました」

「それで、結果は」

「捕らえたC国反政府組織の工作員は、約三十名。こちらは撃たれて怪我した者二名と軽症数名で済みました」

「こちらは、何人居たの？」

「はい、HG社長と配下の碓屋のエージェント達九名とその他自分を含む十四名とSR大尉とAT中佐の部下のOJ少尉の計二十五名でした」

「そんなに碓屋さん以外の部外者が居たの？」

とEM大尉が驚くと、

「はい…でも、皆さん〃特別銃器携帯・使用許可証〃を所持していました。また、その中には自分同様にHG社長を師匠とする仲間のNAとKTも入っています」

「HG社長って、ご自分の弟子達以外にも、その予備軍が多く居る様ね」

と言って、EM大尉は、ため息をした。

「はい、自分も旅行参加初日にそれを知り、驚きました」

「で、HG社長の指揮はどうだった？」

とEM大尉は、ワクワクして訊ねると、

「凄かったです。その場で采配して、HG社長自ら率先して作戦を行っていました。また皆それに従って、各自自己判断をして作戦任務に就いていました」

「そう…碓屋さんの方々の結束力とその部外者の方の連携が出来ていたのね？」

「はい、そうです。皆さんH G社長の指揮の元、自分も含め一丸となって作戦を遂行しました」

E Yが嬉しそうに話すと、E M大尉は複雑そうな顔をして、

「そう…まあ…いいわ。それでS Rは元気だった？」

「はい、お元気でした。自分がこの海兵隊の隊員と名乗り、大尉の部下と言う事を知って驚きましたが、自分が一個人としてH G社長の旅行に参加しているのを知ると、掃討作戦中に、相手として側に置いてくれて色々な戦いのノウハウを教えてくださいました」

「あら、それは良かったわね…でもあの人ったら粗削りで、粗野だから…」

とE M大尉は、ウィンクをして苦笑した。

翌日、I YはF県領地のお土産を持って、B侯爵邸を訪れた。

「お帰りなさいませ。Yお嬢様」

と、執事が正面玄関から出迎える。今日は任務でもなく、ただ父親と妹に旅行の土産を持参した娘という体なので、I Yは堂々と正門から入っていった。

B侯爵の執務室に客として迎えられる。そこには、妹のB Kも居た。

「父上、旅行のお土産を持参しました」

「ありがとうございます」

B侯爵は嬉しそうに、I Yから土産を貰った。

「はい、Kにはこちらのお土産」

「ありがとうございます。姉上様」

と言って、I YはB Kに土産を渡す。

「旅行はどうだったかね？」

「はい、最初は楽しい旅行でしたが、最終日に事件に巻き込まれました」

「…大変だったそうじゃないか…お前のお目付け役として同行した秘書のTKから聞いてはいるが」

B侯爵の話に、IYは驚いて（なんですと！私のお目付け役って…あのオンナ！）と怒りを覚えたが、それをここでとやかく言っても意味が無いと気を取り直して、

「はい、でも今回の旅で大きなものを得ました」

「ほう…得たものとは？」

「はい、碇屋の皆さんの結束の強化と、次の新たな人達とのご縁が深まりました」
と、にこやかにIYが言うと、B侯爵も嬉しそうに

「…そうか」

「あと、OT殿下にお会いしました」

「なに！殿下に？（OT殿下は、B侯爵の正妻の叔父）」

「はい、殿下は父上によくとおっしゃっていました。また、私達の働きをしかと見たとも…」

「そうか」

●エピローグ、骨粗鬆症予防

白山亭母屋…

「社長、F県領地の漁協組合さんから冷凍便が届きました」

母屋の縁側でガンスミスの作業から一息入れてパイプを吹かしているHGの元にSMが来て言った。

「そうかね、届いたか。伝票はKMに渡してくれ」

「はい、それとですね」

「なにか？」

「いや…まあ、厨房に来て中身を確認して欲しいのですが…」

「何か違うモノでも入っていたか？」

「いいえ、注文通りの海産物ですが、その他にも…」

「分った…でも、この格好では厨房に入れないな。ひと風呂浴びて着替えないと…」

「いえ、直ぐ済みますので、厨房の勝手口で確認してください」

「…わかった」

H Gが作業着のまま、S Mの後について厨房勝手口に行くと、

「今、持ってきますね」

と言って、S Mが厨房に入ると、

「ちよつと、M Pさん手伝って」

と店内に声を掛けた。それを聞いたH Gは（M Pをわざわざ呼ぶと言う事は、そんなに重い物なのか？）と思った。

やがて、M Pに運んできた大きな発泡スチロールの箱が厨房入り口に置かれ、S Mが蓋を開けると、注文通りのF県領地特産の魚介類が入っているのと一緒に小魚の干物が大量に入っていた。

「これは？」

「わたしは注文していませんよ。小魚の干物は…」

とS Mは困惑して答えた。

「結構あるね」

「お酒のおつまみにはもってこいですが、お店で出すのは…」

「そうだな…他のモノは？」

「はい、あとは注文通りです。特に甲殻類は今が旬だそうで、漁労長さんから地元での料理についてメモが入っていました」

「うゝん、問い合わせるか…」

H Gはスマートフォンを取り出し、F県領地の漁労長に電話すると、

「あゝ、届きましたかね。それは良かったです…はい、小魚の干物ですか？ああ、それは以前お越しになった時に、社長さんの娘さんが美味しそうに頬張っているのを見て、一緒に送りましたです。両手に干物を持って、口にも頬張って、嬉しそうに食べていたものですから…あ、お代はいりませんよ。これからも御贔屓に」

「…ありがとうございます」

と言って、H Gは通話を切ると、

「…これ、多分H Y用だな」

と呆れて言うと、S Mもつられて

「そうですね(笑)」

H Gが小魚の干物を取り分けると、

「…どれ、試食してみるかね」

「あ、わたしも食べたいです」「ワタシもネ」

とS MとM Pが言ったので、

「分かった」

と言って、H Gは小魚の干物を持って母屋の台所に行くと、ガスコンロに網をおいて、一部を焼くと共に、残りを冷蔵にしまった。

物の数分で大量の煙が立ち上り、H Gは慌てて換気扇を回した。

「意外と油が乗っているな…直ぐ焦げそうだ」

と独り言を言って、コンロの火を弱火に調整して、干物をひっくり返していた。

「…中庭で炭火でじっくり焼いた方が、うまそうだな」

と言って、皿に次々と焼き上がった干物を乗せていく。

「あちっ！」

と言う声に驚くと、皿に乗せた干物を取ろうとして、手を出したものの、干物が熱くて慌てて手を引っ込めているHYの姿を見つけた。

「お前は、猫か！」

と呆れて言うHGにHY

「えへへ…美味しそうな匂いがしたもので…」

「だからと言って、つまみ食いの泥棒猫はダメだぞ」

「はあ〜い」

と言って、HYは俯いた。

「みんなの分もあるし、今焼いたのは、まだ一部だけなんだ」

と言って、HGは冷蔵を開けて大量の小魚の干物をHYに見せた。

「…随分ありますね」

「F県領地の漁労長さんからご厚意で頂いた」

「そうなんですか！わたし、あそこの干物好きです」

「…HY」

「はい」

「眼が餌を前にした猫の様になってるぞ！」

「えへへへ」

「さてと…」

HGは焼き上がった干物を別の皿に取り分けると、

「こんなものかな…」

「別けてどうするのですか？」

「店のS MとM Pも食べたいと言うのでね。持って行ってやろうと」

「あ、わたし持って行きます」

「枚数は数えてあるぞ」

「…途中で盗み食いなんかしません！」

と言って、H Yは膨れた。

H Gは母屋に居る人達を食堂に集めて、干物を出した。

皆食べて、口々に「美味しい！」「頭から丸かじり出来るわ」と口々に言った。特にF 県

領地の慰安旅行に行けなかった、H Gの姪のH Mは

「わたしも行ければよかったのに…」

と言った。

あまりに美味しそうに干物を頭から齧るH YにH Gは

「本当に美味しそうに食べるなあ…漁労長さんが『娘さんが美味しそうに両手に干物を持つて、口にも頬張って、嬉しそうに食べていた』と言っていたが」

「…あら、わたし娘に間違われました？」

それを聞いたI Y達（そりゃ、間違われるかも…）と思った。

H Mの同僚は、

「このまま骨ごと食べられるので、カルシウムも採れていいですね」と言ったので、H Gは

「H Y…骨粗鬆症の予防にも良いそうだぞ」

とH Yに言うのと、途端にむくれた。